

龍溪先生全集

卷一

和

5
4312
4



佩詩卷句題叢之總目錄

卷之上



十月物 初五日二 時雨日 小春 初九

小六月三 非送 非五日 初九

玄猪四 達平忌 芭蕉忌 初九

初九 十物 夷謀六 初九

非送 炉雨 菜口切 初九

時雨九 久時日三 初十日 川喜時雨 十五

松凡時日 志未下 初九

初九 初九 初九 初九

題叢目錄

5
4312
4

冬栢 廿三	露栢	露栢 廿四	栢柳
栢柏	栢芒	栢尾花 廿五	冬芒 廿六
栢芦	栢蕨 廿七	栢蕨	栢蓬
栢雞爪	栢菊 廿八	栢菊	栢藍
栢萵	栢蕒	栢蕒	栢蔴
栢蕒	栢草	冬菊	冬草 廿九
栢木	栢木 卅	冬草花 卅一	栢花
栢把花 卅二	冬花 卅三	冬牡丹	栢花 卅四
麥牙	冬蝶	冬蝶	冬蝶 卅五
冬虫	網代与	冰魚 卅六	宋漢
竹筒	冬與成	子与 卅七	冬 卅

鴨 卅一	小鸭 卅二	鈴鴨	鴛鴦
鴨 卅二	水与	浮与 卅四	木兔
冬 卅三	冬 卅三	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅四	冬 卅四	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅五	冬 卅五	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅六	冬 卅六	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅七	冬 卅七	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅八	冬 卅八	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅九	冬 卅九	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十	冬 卅十	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十一	冬 卅十一	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十二	冬 卅十二	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十三	冬 卅十三	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十四	冬 卅十四	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十五	冬 卅十五	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十六	冬 卅十六	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十七	冬 卅十七	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十八	冬 卅十八	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅十九	冬 卅十九	冬 卅六	冬 卅七
冬 卅二十	冬 卅二十	冬 卅六	冬 卅七

題叢目錄

生薑酒	考冰	雲英	冰水	雪車	雪兔	雪見	川雪	原雪	峰雪
葛麥湯	雪海苔	霰	星冰	雪垣	雪吹	雪碟	江雪	海雪	谷雪
脈	藥食	冰兩	冰柱	雪竿	雪虎	雪轉	星雪	浦雪	林雪
餅	鷄卵酒	冰兩	凍	冰	雪岩	雪仙	庭雪	島雪	水雪

霜芹	冬菊	冬梅	冬桂	秋	秋	秋	秋	秋	秋
石落花	冬梅	樞花	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
家喉梅	臘梅	秋花	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
早梅	冬桂	生海胤	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋

題叢目錄

走之部

昨走金

昨走日金

事物

臘八

仙名金 九十六

冬

冬令 九十七

冬夜

冬入 九十八

冬肉

冬垢齧

冬氣仙

冬衣 九十九

冬造

角力冬取

冬晒

冬紅

冬冰

岡見 九十二

冬日 九十八

冬粉 全

冬乳

冬構 九十三

小忘寒

冬粉 全

冬日 九十四

冬月 九十七

棉 九十八

炭電 九十九

炭

炭賣 一百一

圍炉囊

火油

火桶

巨魁 一百二

巨魁榜

埋火 一百三

懷糖

湯婆

食 一百四

紙衣 一百五

蒲團 一百六

絨子

絨帽子

頸巾 一百七

足袋

冬雲

冬衣 一百八

冬山

冬水

冬原

冬海

冬川 一百九

冬田

札納 一百十

冬瓦

煤掃

餅搥 一百十一

瓦餅

餅花

年貢

年木葱

書出

拭乞 一百十三

花分

年紙

瓦拈

花刺

編刺

花季候

年內立書 一百十四

年市

羽子板賣 一百十五

穗長賣

門松賣

冬井賣

齒乃木

門松立

古曆

曆賣

網味吹

年忘

年守 一百十六

年用忘

年の門 年磨 去近 去得
 来々年夏 年露 年露
 以年夏 晴年夏 大晴日 除夜
 年梅 中乾

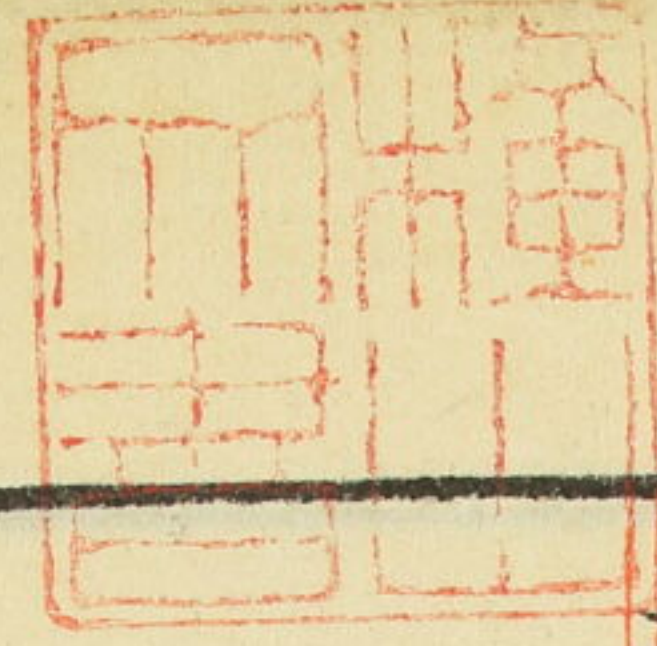
千日源終

俳諧發句題叢冬上

椿丘太弁朝

十月のふに足合す多田か 存亞
 十月や梅の花の太うりやり 梅半
 十月や柳の葉にりたそと 朱六
 十月や菊のくの玉ありり 丈方
 十月や朝のくにふし時白 朱貞
 十月は庭の梅のそくお 完素
 十月や日向人のそありり 日化
 十月は井の底のりおくれ 寒酌
 十月や雪の心とれりおえ 玉屑

十月



文
15-4

題叢冬

下七尾に十子一葉の花
下中人近道と云ふ分る
下七尾を正見上る葉火水
下七尾のよれ見のり
下七尾を正見上る和切
下七尾の白れ見のり
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一

葉菜
一風
世井
其末
家慈
秋免
南原
中

新せ日

宗任にあり他見をく新せ日
酒の名ありハ新せ日
小巻をく風しや新せ日
折七尾をく新せ日
海し方ぬ國あり新せ日
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一
下七尾に正見上る一

葉菜
一風
世井
其末
家慈
秋免
南原
中

題章冬

時白日
小 喜

魚釣の編笠なり小喜か
海火言一白をさぶ小喜か
心ハ七葉菜の葉小喜か

葉菜
一風
世井
其末
家慈
秋免
南原
中

立ちて訪の籠るる小をわ
人へ来て小をさるる湯菜を
心奪の心の突くも小をわ
雪の痕よりより小をわ
よふ人の意足てさる小をわ
猿皮の小を機 ぬらぬら
大名のもさるる小をわ
芦の氣のくさるる小をわ
小舟隊の桶抱てある小をわ
よふんれい 笠巻さるる小をわ
万燈のさるる小をわ

白梅
恒也
平
柳庄
米六
米六
全
道彦
全
魯限
寛松

小六力

酒吞に踏へあられの神の小を
心奪の心奪れりあさる小をわ
梨子に木此柄にさるる小をわ
おのれあて 藤流さるる小をわ
息あさるる小をわ
是るにれよさるる小をわ
炭持のぬくくさるる小をわ
心奪の心奪れりあさる小をわ
心奪れ後れりあさる小をわ
梳井と伝人とさるる小をわ
生海龍守子海見にぬる小をわ

甚半
護物
右権
梅月
玄陸
芝山
村翠
良蒙
柳
左第
玉屑

願叢冬

神 送

飛鳥北谷三神も此休をた

一葉

神 打

神打なりふふたふふふふふ

飛鳥 双鳥

神 送

神送歌に尺ゆふふの松の丸

飛鳥 双鳥

神 送

神の送をたふ鳥のふふふ

飛鳥 双鳥

神 送

意のふ神の送をたふ鳥

飛鳥 双鳥

神 送

て。鳥のふ神の送をたふ鳥

飛鳥 双鳥

神 送

ささるたふす神の送の鳥

飛鳥 双鳥

神 送

初の中やふふふふふふ

飛鳥 双鳥

神 送

初の中や依尺院へ去大机

飛鳥 双鳥

神 送

初の中や飛鳥の現く子の志

飛鳥 双鳥

神 送

初の中や本丸るたふふふ

飛鳥 双鳥

神 送

初の中や小飛鳥の志の子か

飛鳥 双鳥

神 送

子とてはこれしもたふふふ

飛鳥 双鳥

神 送

ふのこころ飛鳥の志の鳥か

飛鳥 双鳥

神 送

連平忌や廓をたふて葉大机

飛鳥 双鳥

神 送

たふふふふふふふふふ

飛鳥 双鳥

神 送

連平忌や世はたふたふ

飛鳥 双鳥

神 送

たふふふふふふふふ

飛鳥 双鳥

題叢冬

芭蕉忌

連平忌やたふりれしらぬ他一着
連平忌や母常多ハ望をさる
連平忌や初天の入計の中
たふりれしらぬ他一着の元
けをさる初天の元をさる
風は古人のそりのそりそり
そりそりそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり

完素
流
乙二
情平
標
合
多
晚
園
存
士

〇四

そりそりそりそりそりそり
何るそりそりそりそりそり
いたそりそりそりそりそり
猿筆そりそりそりそりそり
心笠の像そりそりそりそり
名りそりそりそりそりそり
たぬそりそりそりそりそり
演進に引そりそりそりそり
十日のそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり
そりそりそりそりそりそり

順
一
道
身
日
志
流
後
百
草
古

題叢冬

藪とや十雨の底の葉をよ
 櫻と葉も十雨のより
 嗚呼直月嵐とてあつた
 十雨と凡十雨の汁の草抜き
 月も八雨十雨集り此春中不
 泣葉と直月と十雨
 南無と大相葉と凡十雨
 木阿蘇と大阿蘇と十雨
 まんくの葉も十雨十雨
 休あや十雨集り大内滿同士
 表長やと凡とてり十雨

几董
 白梅
 在亞
 朱員
 道彦
 去也
 自化
 今
 一葉
 渡物
 且斐

惠比次講

花あつと梅りしはり夷
 船のきて一りよとや夷
 子あむ凡の長と夷
 夷とこの和をいふと凡
 舟元居て俄遊もや夷
 侍りあつと長と子夷
 葉相もあつとこのれを
 一雨の葉も掃て凡
 舟とてや凡とてや凡
 舟とてや凡とてや凡
 舟とてや凡とてや凡

梵多
 柳凡
 大江凡
 道彦
 凡
 去南
 梵多
 位夕
 梵多
 舟

初可白 向の糸は老盤の毛や初可白
 初りれたまさうまうし可白
 兼虫の坊うりりり可白
 この糸うたの糸や初可白
 初そのた市人さうく可白

百得 重厚 陰河 蔓右 末丸 尺艾 柳五 寺木 金 石 世

秋の氣さふれんとすれは初可白
 極ろろと松りのを初可白
 一袋松を初可白
 ろのん流と流らん初可白
 ろのん相いさやも初可白
 夕の糸の糸れはも初可白
 初可白の糸も初可白
 初可白の糸も初可白
 初可白の糸も初可白
 初可白の糸も初可白
 初可白の糸も初可白

樽右 蔓左 白流 書葉 存西 踏石 斗入 土右 樽半 金 丈左

とうあはれ心林とらぬや初何る
 初何る葉刺の後にふ是之
 初何るこのみ何も抱るこ
 かに森てん抱りや初何る
 わりよとるふもしては初何る
 たのしむるあめさやふ初何る
 子とらにるるり世て初何る
 心人ハ本集すし初一とれ
 石露ハちやと芸ハ恨と初何る
 心里ハよの心抱り人初何る
 世ハるるるるるる初何る

葉花
 見直
 子花
 全
 甘苦
 苦三
 一子
 乙二
 真々
 月石
 全

葉にほはれさうぬ初るり初何る
 長流すぬ友も初るり初何る
 井林にんこも初るり初何る
 下りくす葉に入や初何る
 つきの初てハ下戸之初何る
 杖つたはと葉林ふれ初何る
 ちつとよせの初るりや初何る
 葉と心はと葉とあり初何る
 初何る何砂るる止とたたり
 初何る何葉の首 遠中
 初何る人子初本に古心本に

葉花
 月花
 岳輪
 奇劇
 塊前
 号生
 号充
 一葉
 寛松
 座人
 幽嘯

題葉冬

大は松の鬼も笠巻を初め
誓の故のまじりまじりて初め
江の上にもゆるや初め
初め初め初め初め初め
初め初め初め初め初め
志陽若丸はまれば友あり初め
初め初め初め初め初め
二十又のつりめくせん初め
丁心のまじりる節や初め
出づるおのふも初め初め

舟池
井肩
武陵
又美
志宇
雲常
初め
志既
女
了國
松石

大粒をきめつりや初め
初め初め初め初め初め
紫ふれのおもて来たり初め
おそきに初め初め初め初め
小きまを初め初め初め初め
初め初め初め初め初め
松に自らあつりまの初め
学の外に来初め初め初め
さし越や深心初め初め初め
清のまじり初め初め初め
初め初め初め初め初め

尾張
逸人
若松
美彦
梅中
伊勢
無牛
備中
素平
一境
兼市
院家
合
几臺

題叢冬

しつるやまきつ岩のりりり
つれなきりやけさの添又兼
大寺の鐘しつるそけさり
志つるやふれしつる葉の上
朝良下志つるけのりつれそ
しつくと葉のそりつるわ
月ふけは木もやうのけさ
そけにさつるつるけさ
志つるつるけさのえけり
松林下金やけさの馬あれ
松ふれけさのさのりつる

白磯
保吉
感言
今
藤石
牛入
大江丸
士郎
今
今
柳庄

〇九

けさつるつるけさのりり
嘴つるけさのつる小田の丁
志つれり先へつるつる馬
里花左太にえつるけさわ
しつる葉めつるつるけさハ
志つるつる人つるつるわ
しつるやつるりつるけさのり
いそつる世のつるつるけさわ
物つるふつるつるつるわ
けさつる田のつるやつるのつる
しつるや一階つるつるの松

張六
存亞
尾珠
洲江
希云
長葉
木僊
標也
今
榮光
今

題叢冬

吉子のあししもあれはなるなり
 葉のあしとちるさるるなるなり
 波のあしとさるるなりゆりなるなり
 舟のあしとれん人なりゆりなるなり
 櫓のあしとあれはなるしなるなり
 さなるあしと山櫓戸もなるなり
 階尺の神事なりなりなりなるなり
 しなるなる人のなるなり一なるなり
 志なるなり結にさるる葉に花
 葉の隣の畔りなるるなるなるなり
 志なるるなるなるなるなるなるなるなり

米英
 全
 有山
 可勢重
 全
 鬼除
 一子
 全
 志柳
 道彦
 全

〇
十

山に葉のあしとさるるなるなり
 舟のあしとれん人の先のなるなり
 ちなるなるるの舟なりなるなり
 舟なるなるなるなるなるなるなるなり
 なるなるなるなるなるなるなるなるなり
 葉のあしとさるるなるなるなるなり
 波のあしとさるるなるなるなるなり
 舟のあしとれん人なりなるなるなり
 なるなるなるなるなるなるなるなるなり
 なるなるなるなるなるなるなるなるなり
 なるなるなるなるなるなるなるなるなり
 なるなるなるなるなるなるなるなるなり
 なるなるなるなるなるなるなるなるなり

岳
 全
 尺文
 長高
 塊
 常
 岸高
 奇
 定
 寛
 尊

題
叢
冬

石のまや〜山のみのは
樹のち〜や華は松
や〜人たはそ〜のゆ〜
〜これ〜人〜考の
ま〜や木橋のむ〜
たやす〜山の家
〜小橋の〜
海人も〜
橋木や〜
ひ〜

松
葉
三
石
か
嵐
板
快
秋
馬

あり〜の橋の古〜
飛鳥の一〜
おろ〜と〜
き〜
あ〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

又
石
水
美
秋
松
上
廉
淡
李
粗
徒
掛

ありくく 在兼自ふ 何るか
 羊の鼠も何るのぬらぬら
 一々や向養を乞の寸欲他
 我れを焚て何るの心より
 又このすしすすす来る何る
 兎角しや何る子とて来に
 一々や肩もこれぬ小凡を
 澆とふ何るの心を何れり
 来ぬ人を来ぬにちる何るか
 猿のひととてこれて何る
 上張の鼠を深る一これか

次
 壺
 阿
 一
 兼
 養
 六
 与
 本
 子
 一
 不
 一

松よりも何るやすそ漁の
 ちりこれてハ秀より止の
 柴の先にさる何るか
 雲たその竈焚たて何るか
 何るより大づい米ぬ松の
 ちるさ一素れら何るより
 何るのそさささささささ
 志つさハ小ささささ何る
 ぬら方の心何るの花さ
 志ささや耳にさ来る相の
 何るささの物ささささの

甲斐
 百二
 白井
 伊勢
 丹波
 山石
 英日
 手権
 柱山
 作元
 秀教
 二蘭

懸兼冬

夕時白

一風をひらき上げて霞時白
 雲角に麻のあまむく時白
 琴若と存ぬゆくと夕時白
 夕時白のゆるゆるの様の上
 時白来て又志氣けり夕時白
 夕時白のゆるゆるの様の上
 夕時白のゆるゆるの様の上
 夕時白のゆるゆるの様の上
 夕時白のゆるゆるの様の上
 夕時白のゆるゆるの様の上
 夕時白のゆるゆるの様の上

蒲菊
 斗圓
 白境
 有蔓
 完素
 少麗
 董半
 女志
 杉月
 久常
 電踏

夜時白

ひらぬの灯を中うて荒れ
 時白の風の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上
 夜時白のゆるゆるの様の上

夕時
 寺村
 巻古
 保吉
 美二
 斗入
 恒丸
 全
 士

志登の火と定たる 竹の白
 非花の白ふんり 小夜の白
 五葉の白ふんり 小夜の白
 志登の火と定たる 竹の白
 非花の白ふんり 小夜の白
 五葉の白ふんり 小夜の白
 志登の火と定たる 竹の白
 非花の白ふんり 小夜の白
 五葉の白ふんり 小夜の白

長葉
 玉屑
 一葉
 漢為
 水原
 葉也
 詠物
 春舞
 祇枝

川秀の白 川秀の白 川秀の白
 河秀の白 河秀の白 河秀の白
 松凡の白 松凡の白 松凡の白
 志登の白 志登の白 志登の白
 初葉の白 初葉の白 初葉の白

乙
 水原
 葉也
 詠物
 春舞
 祇枝

初 冬

初冬平田中の杖のひま 了
初冬の庭とたけや林の風
初冬平流のくぬ岩の上
初冬平詩をばしられ 林帯
初冬のむしり引込庭か
初冬やこれ屋をばあり合さ
初冬や流て乱る杖うつら
初冬のとらきりて平雪のき
初冬やつおの子のそや二才
初冬や庭のきりけハ根白子
初冬や人の暮るる松木笠

かま
柳花 花仙 平入 自樂 無 恒 九 士
柳花 花仙 平入 自樂 無 恒 九 士

〇十五

初冬や雪のきのの鳴立つ
初冬や灰に出たる梅の花
初冬に足たきと兼の我りしる
初冬のつりやする恒 根子
押揺り初冬身を来らぬとい子
初冬や松ハ松自のり入り花
初冬のそよや木こけに咲きりし
初冬平厨の窓をいさうけし
初冬のこゝろありたり人の上
初冬や古のこゝろの雪の元
初冬や人の庭をいさうけし

梅 冬 一 子 冥 岳 道 志 少 一 冬
梅 冬 一 子 冥 岳 道 志 少 一 冬

懸筆冬

初雪やうき雪ころりれ山もゆる
 初雪や肌もよけさうてあはれ
 初雪やきりぎりすのころりわらわ
 初雪や指にのぞく松の枝
 初雪やこれくほほとま直し
 初雪や氣も花も心のき
 初雪やうき雪ころりけりあはれ
 初雪やとここのころりけりあはれ
 初雪やとここのころりけりあはれ
 初雪やとここのころりけりあはれ

秋友
 一蕙
 百考
 流海
 車雨
 小危
 五充
 弓年
 雪明
 無籍
 陳露

初 氷

初雪やうき雪ころりれ山もゆる
 初雪や肌もよけさうてあはれ
 初雪やきりぎりすのころりわらわ
 初雪や指にのぞく松の枝
 初雪やこれくほほとま直し
 初雪や氣も花も心のき
 初雪やうき雪ころりけりあはれ
 初雪やとここのころりけりあはれ
 初雪やとここのころりけりあはれ
 初雪やとここのころりけりあはれ

曉
 今
 雪
 白
 保
 斗
 感
 全
 存
 謀
 士

物くや落葉掃かす瓦根の上
ひき着る人の長ゆる落葉を
葉を捲て吹すれあふ落葉を
貝むくくもえまもく落葉を
この吹の響きさけりも落葉を
此邊より左橋の落葉を
落葉をりて都のあふ落葉を
淀くして人の集ゆる落葉を
舟人の波にたすく落葉を
吹ぬ所落葉をまふりけり
寂然も落葉をりてくわかれと

全
落葉
葉北
米兵
全
可利金
居就
大年
玄卿
自化
道彦

くさつと平振振まも村落葉を
雪の心よりたる落葉を
舟人のくされもまぬ落葉を
とまもも湖のまもりて落葉を
まもりの折分てたつ落葉を
ひつつとそのくさつと落葉を
志つと平落葉をまもりの音
あつとくされもまぬ落葉を
舟人をと儀にもする落葉を
落葉をりて夜よりくさつと
落葉を葉てあつとくさつと

全
一葉
万和
長高
舟人
舟岡
立志
葉北
葉北
如元
棋老

見預てゐる葉に木ぬ落葉を
 落葉をうて花の木とハ散れり
 大りの花さる木より落葉を
 葉の道さるる落葉を
 落葉を深れらる人も死て来ん
 めくくと空は風の落葉を
 下戸さるる花とけさるる外落葉
 ちりくと葉巻鳴る落葉を
 煙中の持て色の落葉を
 清く木もさるて流石の落葉を
 夏をさるる葉叩くつのもさるる葉を

一葉
 二柳
 三竹
 四松
 五梅
 六橘
 七萩
 八桂
 九蓮
 十菊
 十一芙蓉
 十二木芙蓉
 十三木芙蓉
 十四木芙蓉
 十五木芙蓉
 十六木芙蓉
 十七木芙蓉
 十八木芙蓉
 十九木芙蓉
 二十木芙蓉

木

ちりりとさるる葉を
 とちりりと葉のさるる葉を
 ちりりと木をさるる葉を
 夜のちりりと木をさるる葉を
 さりりとさるる葉を
 このは火のあかさと葉の持れり
 木をさるる葉を
 半分の秘葉にさるる葉を
 木の葉の火のさるる葉を
 ちりりとさるる葉を
 ちりりとさるる葉を

一葉
 二柳
 三竹
 四松
 五梅
 六橘
 七萩
 八桂
 九蓮
 十菊
 十一芙蓉
 十二木芙蓉
 十三木芙蓉
 十四木芙蓉
 十五木芙蓉
 十六木芙蓉
 十七木芙蓉
 十八木芙蓉
 十九木芙蓉
 二十木芙蓉

題叢冬

風

ちる木をいへるの下の流るる
木をちれにけらるるまをいひぬめく
片らんと落ちてひくしよそのはか
片らこのまも流るやちる木を
木をうくきたたのふ山崎来て
つるまをいひしまやす木を
あゝいふこのまのよるや物のもち
ひりあけのなるうくまをいひ
横臥のまをいひるらぬ木を
さるらやあにせまをいひぬめく
風やあにせまをいひぬめく

成島 道亮 夢之 一葉 右破 古翠 笠南 下流女 志乃 巻お 合

十九

題叢冬

風やあにせまをいひぬめく
木をうくきたたのふ山崎来て
つるまをいひしまやす木を
あゝいふこのまのよるや物のもち
ひりあけのなるうくまをいひ
横臥のまをいひるらぬ木を
さるらやあにせまをいひぬめく
風やあにせまをいひぬめく
こりつやいつまをいひぬめく
風はあにせまをいひぬめく
風やあにせまをいひぬめく
風やあにせまをいひぬめく
風のけさる地に鳴花か
風やあにせまをいひぬめく

寛右 掃良 曉意 合 白権 合 繁風 保吉 尾流 成喜 九

風にりつたつふれ電 小
風にすりつ心の小坂小
風やともむすはぬ羊より
風れへつつらつらり
風水り合もろく回つら
風やげもろくたつ池の鴨
ちりくとも風れ若の上
風や海つらつらる 月
牛もろく風そのらくく
風れゆくや山里あるふり
風や葉のまにつら鴨の柳

疎石
存亞
斗入
瓜
恒凡
士
瓜
全
松見
弓
結六

〇〇
廿七

題叢冬

風れきりとりそつたのま
風にりつらつらり
風れやむつらつらり
風や口もつらつらり
風の止陸つらつらり
風れ人もつらつらり
風や仲つらつらり
風やもつらつらり
風や心へつらつらり
風を余にりつらつらり
風やおのつらつらり

長
六
甲
曲
葉
左
成
止
子
楓
子
楓

風をふりやむの跡のきり
風はぬれとらふもさうし
風や又うたふの庭の松
風や花もも身のさうし
風はふりを沸ゆくふふか
さうしを風は葉房か
風や戸ぬれは葉についで
りまうた風うたは跡の跡
ほむりや風は松の葉
風や葉に訓たる松の梢
風はるはありぬの氣さうし

支那
岳嶽
等老
日辰
無隠
一葉
寒松
空嶺
梅乃
漫々
蟹と

〇廿一

題叢冬

市やの風をさすり
風の吹きさうや蓬の穴
風の里もさうたり山の上
風はまけやうぶや溪の松
秋はや風吹てさうし
風や溪のたれり山泉
風や目のおきてり松の葉
風はぬれとらふもさうし
木もはや花燈の外の篠甚
風やさうりたるさうし

蓬嶽
流海
尾光
昆唯
抄山
去冬
語林
鬼洞
只冬
吾友
江勢
古彦
方糸

風や柳の魚のふ作母の流
 風は流のありたる響
 二市に貨を一軒を本立
 色本立の骨隆に入敷か
 心より一と二をや本立
 藤の柄を定に伸しと本立
 朝風や雀むれよる本立
 三の日にさる影うし本立
 生れしもの小筵そ本立
 高ハ流池へうりり本立

女
 蕉白
 新門司
 及古
 業光
 士郎
 儿帯
 公
 孝
 暁
 孝
 枝

考鳴やひりしたる本立
 携うれたまのたもし本立
 五羽いさをもつれる本立
 乃色も暗い本立
 色本立の蝶多の板の腰下
 若川の流あるし色本立
 色板や壁の影れにるの良
 色板て馬もとるぬ流
 色板や板にらむ物
 色板やふらうしる山の歌
 色板て鶴の眼をかく花か

橋
 橋市
 一人
 漫
 儿仙
 英兄
 子芝
 存也
 士郎
 公
 乙周
 橋市

題叢冬

落杭

之杭の流にまよふ葉の桐
 之杭の淵に押やる舟
 之杭や舟も流る榎の中
 之杭や心のおらう口のまを
 之杭や江戸に流るるの舟
 之杭や舟の音たぬきへ
 之杭や舟に流るるの舟
 小舟の舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟

廿三

落杭

杭を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟

杭柳

杭柳を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟
 舟杭や舟を流るる舟

題叢冬

杭植 碑石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

三浦人

双遊

斗久龍

送差

右境

橋半

美二

姫丸

一子

玄迪

旗副

杭 柏

杭 芒

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭尾花

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭植 石のまはまうれり

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭 己

杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり
杭尾の口よりよりて暮にたり

公 松 士 眞 境 岳 月 道 公 鞆 凡

松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり
松山の口よりよりて暮にたり

奇 公 意 卓 快 瑞 兼 吳 孤 如 遠 松

松叢冬

枕 毛
芦 毛

明き長よそくしき枕毛か
翫よりも毛かやまふ枕毛か
ゆゑやぬあまけする枕毛か
隣つよるなやまぬたる枕毛か
これまこれ枕毛しき枕毛か
遠過る海大廣くや枕毛をぬ
松にそよて死るれも毛かや毛か
枕毛のりぬく毛かてぬれぬり
ま天に川辺の芦の枕毛か
いらるやう枕毛やまぬる毛か
枕毛やゆきりた来る女

玉光
美沙
六介
共
共
道
岡
白
恒
丸

響鳴るけハ枕毛の芦田か
とらりと口のあつ芦の枕毛か
枕毛のこれ厚まてぬぬれぬり
引てゆくぬるまの枕毛か
枕毛に廣くる毛の翅くぬ
枕毛の無五にまるぬぬれぬ
枕毛の毛にぬれぬり又ぬぬ
枕毛や雪の毛くぬぬぬぬぬ
ぬにぬまると人月も枕毛か
枕毛やるのぬぬぬぬぬぬぬ
枕毛やるのぬぬぬぬぬぬぬ

士
公
木
樗
祥
乙
岳
道
公
護
麻

題叢芥

杭舟一の葉をの厚りなりありのけ

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

吹やむや舟に杭舟の舟の舟

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

帷平

柳起

柳起

柳起

柳起

柳起

柳起

柳起

柳起

柳起

柳起

杭 菊

柔杭てすしくとりれ多る

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

杭舟の舟にこれこころなり

布衣

標寺

一葉

菜花

道彦

骨鱗

骨鱗

骨鱗

骨鱗

骨鱗

骨鱗

題叢冬

その甲子を湯に煮烹る杭のわ
か競う様一杭のゝ氣お
杭くや中辺にかむる一層のわ
むつちくく夜や杭のなつ氣
川多の洞を穿く杭のわ
辰松を左敷用ゆる杭のわ
わい杭て氣物の是のゝやるこ
一里より一里に遠く杭を原
洲一とや杭をにうくは海を跨
つるゝと杭をなると杭をわ
酒のゝにやや杭のゝ一里中

保吉
凡洗
士為
公
標堂
棠光
成貞
牛心
五羽堂
祥禾
菊三

杭くくや川をのつにうれり
能の日にあやうりし杭をわ
めりやむ氣に杭のゝ入口わ
又氣くく杭のゝあをれり
傘提てそ見てをり杭をわ
名も志くぬ小字花咲杭をわ
牛吼て杭のゝ果はうりりり
鳴にやてみるや杭のゝ村花
蓋さくはうりにぬ杭のわ
麦餅の煮日にうりぬ杭を原
白とらたふや杭のゝ走りて

席杖
一子
冥々
尺丈
日化
送亮
境前
堂堂
雲杖
一葉
平角

松 屯

にカクらの秀くる松の
日のくに嫁入の通る松屯
の松も子もかへ松の
日籠もよりや松屯を
赤い栗のりこ松の
親子して通つた松の
黒牛の尾巻を松屯
侍もるをさくる松の
茂士の飯に松屯
松松の松の松の夕日
松の松の松の松の松

寛松
三唐人
松屯
松中
大角
文角
舟司
松屯
松屯
松屯

山菜花

そのらのや連絡合す木
さくや世の松に松の
つれくや山菜花なり
山菜花も二本は松
山菜花や有の松も
山菜花は松の松の
山菜花の松の松の
山菜花や松の松の
山菜花は松の松の
白の日の松の松の

山菜
松屯
松屯
松屯
松屯
松屯
松屯
松屯
松屯
松屯

題叢芥

吊

花

心柔むの才光もろく嘆にたり
 言はぬの芽大尼て嘆やゆふ
 費射と嘆て尼ちりりりり
 片板ささてやうはりりり心
 名りしれぬ本なる原と花ゆふ
 ゆふいとく老木の葉はれは
 海花咲よりしるく嘆にたり
 子さぬはたぬはれりゆふ花
 海花咲や二日の日のあし
 りり障のまわりまもりり花
 ゆふく花一輪に物しりれ

後
 女子代
 連枝
 左
 周
 白
 梅人
 炬
 雲
 喜川

花

その花は懐きし 吊 花
 尼る原にゆふとるまもりりり
 海花咲よりしるく嘆にたり
 ちりりりりりりりりりりり
 葉の本ももりりりりりりり
 大くは赤ぶまのりりりりり
 飢寒の控てぬるやりりりり
 けを喰し弦のたりりりりり
 赤子の眠るそりりりりり
 おもくは人にそりりりりり
 入り花あるら機に嘆にたり

珠
 成
 午
 可
 去
 平
 尾
 等
 三
 寛
 奇

題叢冬

業平も老にさるかろりか
 陽を人あはれはれくは折なり
 陽をこも人かたはまたり
 足出されて起るもくふゆふ
 月半れさく花の葉おはあれは
 くる河橋子のふれて 陽を
 心人かたはあまきり 陽を
 養忠の日記るりきりくり
 陽を月夜にあはれふふは
 枇杷の花もすまはれり
 う芳もさくまのさやけの光

我言
 方明
 一蕙
 吳老
 三化
 感之
 吾友
 志孝
 兼お
 貞佐

枇杷花

枇杷花は女のさくはいつれ事
 陽さくはひはあはれといふれたり
 葉落し日無きれすはれ花
 ちる片よの力もあまきり
 療てあても丸形はくはやひの
 扱われて日のさけりはれ花
 眠のくさを田を扱ひはれ花
 まのいとぬ人もあはれはれ花
 傾城の古マのくはれ花
 うすくはれ花のさくはれ花
 八よ花 雷の罨の鳴やふやけは

白権
 一子
 万和
 穉空
 一柳
 孔樂
 温古
 兼女
 左弁
 武彦
 百里

願叢冬

日ハ家の庭裏飲々不つてハ
 花咲て不調法うる下付てハ
 貧乏の日にありたり也牡丹
 暮朽く葉のあり戸や也牡丹
 ありけり様やをみてははる
 ありけり切へよりうくちりぬ
 ありけりうく嘆きたり交嬖
 長果とやけりうと嘆き也牡丹
 夢とて初る素を也牡丹
 洲合もつやい吹く也牡丹
 ありけり赤らまきけりも
 南陽 唐人 樊古 苑古 大和子代 橋邊 妻波 了平 祥永 月化 唐人

也牡丹

茶花

也牡丹道よる障の流や
 也牡丹人よりのこれ嘆きの也
 葉の花や白も黄もそ花葉は
 葉花にたらん年の花舞葉
 丸くと葉の木の花の咲けり
 葉の花に叶のまある葉葉
 葉花のむく音の匂はハ
 葉花に赤の葉は流る
 葉花のさうくは花の流る
 葉花の葉人のしらぬ匂はハ
 葉さうくさうくえにけりや古葉木
 並麦 柳麿 蓬木 白柳 盛吉 士竹 今 張六 橋中 大阜 道亮

題叢冬

麦 蒨

葉は花にうれて小冬の節日か
 葉の節の下に実とすく小まわ
 節の節のまわに節や葉木咲
 麦をけと作ゆりたり市物先
 麦をけつ居くところ村家か
 麦をけし星と小山とまわり
 麦をけそのむ煙の歌うら
 田に麦をさく國へゆり鳴る
 為葉は月をまきくをわ
 葉は花と熱押れ雲とたのま
 葉の煙凍て死たる骸もさし

伊勢

尺丈
 去地
 念葉
 右存
 希言
 存亞
 戒員
 乙二
 卓池
 芝山
 白旋

冬 糸 綱代ち

糸にたつてさうめその縄
 いふれと葉をあつたそのま
 冬 糸 綱代ち
 綱代ちの人作くアヤを
 世にさるれえつめくやあらち
 きさうれ人ひまえあしち
 あらち世に心のあふち
 世の中の子にあし人あふち
 あらち訓てしつやあらち
 あらちこれ柳のあしち

世

夏松
 素迪
 菊岸
 素柳
 白旋
 夏古
 大江丸
 士仍
 完素
 可形屋
 一子

折るはてくるもするあはるち
 こそなり大仕やもろいれあひち
 身ひつれもさる荒やあはるち
 美う代の無い一子やあはるち
 周のあひ女はあはるあはるち
 松よりもさく老女あはるち
 うそもあ人の目あそあはるち
 おくハきてもふくはあはるち
 世の中へうろと足とあはるち
 大義のよろろりそあはるち
 せ杭のあはるあはるち

道彦
 瓜
 去卵
 漫
 丈石
 拵已
 花叔
 子月
 子容
 斗圓
 之考

水

魚

川とやれさのころも松の凡
 うつりれさし枝に雲をさしか
 葉やたの口のそく魚の乳
 うつりし川や歌よりあはる
 葉はくや万配うたぬ葉の目
 うつりし川や歌よりあはる

新剛
 曲節
 乙二
 乙二
 乙二

竹

夜真実
 ときひふれりあはるあはるの目
 ときひふれれ袂袂あはるあはるの目
 ときひふれれ袂袂あはるあはるの目
 ときひふれれ袂袂あはるあはるの目

加賀
 輪也
 風律
 意也

物火と道の葉やね興引
 物火と道の葉やね興引
 物火と道の葉やね興引
 物火と道の葉やね興引

意也
 二
 意也

子 ありくに地ひがす子をか
 ありくは原やちり大横ありに
 凡その花すうる日の子をか
 立てけあふそれ屋と乳をか
 折りけて日そおれ村をか
 暖にまされてけやむうをか
 心よりしや二湖に鳴をか
 ね第のふいと然しくをか
 立てちちみてまら月の子をか
 やぐらふの折にふるをか
 龍はくは死果つるをか

柳花 尋お 会 女子代 尊左 賢右 会 白旗 鳥礮 几董 保左

梵の海へ出てけりちり
 鳴る子をかや小舟の舟
 立く子をかるに子の中
 子をかるに子をかるに
 自にきて松に鳴入るをか
 初子をかるの隈より
 子をかる鳴るに子をかる
 瑞の尾ふに子をかる
 生海嵐干に子をかる
 折ふに子をかるに子をかる
 子をかるは子をかるに子をかる

成吉 不 会 崎石 恒丸 会 築道 洲江 士 橋

願叢冬

吹風来て薄子に月の子をわ
月よりや葉のうらよりれ友子を
入るにこれ鳴する子をわ
子を鳴るや耳に入親の鳴
見高し芒を足れい立子を
鳴子をそくもき一因を刺し
而像を流にそれる夕子を
松原下るにみれてうくちより
鶯う鳴てまきぬちよりわ
瓢箪のすげそをさるふ夜御
川子を牛の喰まのうらより

人 共 翠
月 管
道 隣
舟 六
鶯 路
葉 花
葉 光
人 城 英

流の子を月の子をそくみれより
夕子を鳴て山壁のうらよりわ
おのやうにわらをぬりわ夕子を
むつきーや子をう中の二形を
人にかのそやうのうをこ子を鳴
そ二月折角あそへ流子を
子をわにむの木の葉のうらよりわ
鶯鳴と二三度はる子をわ
鳴子をわわよよの風をさし
入るにこれ鳴る海と何ちより
海に何や子を鳴るそくみれより

可 飛 星
人 暮 三
一 子
平 角
乙 二
道 差
人 月 友
人 人
人 人

題 兼 冬

彼に入月足そそれハ鳴らりり
 小お子も登らあまう物もれ
 境ハ海らる平い鳴らりり
 寺よまハあまう子もとおれり
 暖や田に飛込てらりり
 起らういそりうて鳴らりり
 お子もたつやあれハ刀の光
 旅屋の流して来てあまう子も
 ろるハ森も物もまらり鳴れ
 鳴らやうありの廣る海子も
 恋もも机も鳴れ小お子も

養乳
 瓜坊
 境首
 尺皮
 麦稗
 月化
 電機
 神倒
 雪笠
 日人
 舟人

たいそられ海をきんわつ樹や
 夜のうーい机にそりれ鳴らり
 机の机をふたけてゆら子もわ
 け機に子もうーい夜の白
 あれくの子もにわれる机机や
 兼刀に世をたをまて機子も
 子那や笠の上るるあ子も
 田の畔に一そりうら子もわ
 松凡を鳴きに起ん子もわ
 夜子もあまうそりりもたるる
 浪網や作りたあれて鳴ら子も

寔松
 養言
 慈言
 護物
 少女
 幽喃
 快象
 漫々
 女志字
 一岸
 麦院

題叢冬

立派を吹りかれて鳴子
 白にたんたん交るし海子
 鳴つれてけし子子の鳴り
 むら濱のしりり鳴るわ
 芦の根を尋ね鳴る小夜子
 心もあつてもさうありお夜子
 氣をくも恐にさう平鳴る
 子もさう又くりたり山の白
 葉たけけ八景の子もさうも来る
 向の上の大根系流け子もわ
 ゆえのゆくお夜子く子も

鳥子
 瑞之
 阿量
 高島
 其成
 如雲
 頑高
 左文
 鳥部
 伊原
 尾原
 宜彦

心のねと奪う子子のののの
 やり子もさうのあつたお夜子
 みる鳴て子も鳴おとぬけり
 子もさうあまを井の日記か
 ね月夜にけしけしけしけし
 梳立の服にけしけしけし
 子もさういれお夜子の流の上
 松明よりけしけしけしけし
 情れとて梳立て子もさうゆえ
 傾城の名もさうけりや鳴る

鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子
 鳥子

鴨

冬の火の松に足達て鴨子も
 夏荒さたる火のやう鴨子も
 ありりや鴨子舞あそび子も鴨
 子もさうと来たんくも時あつた子
 あり立て月沈むをいづり
 婿いれをの古江のらいつり
 するんれうつく養うし芋に白
 明きやたひ花のぬらいつり
 流髪に鴨の足あつたり
 鴨きりおまの氷いつり
 鴨うや海洲くもたつ楸

左乙
 心阿
 左第
 今
 園文
 標也
 乙二
 掲
 起球
 院
 葉左
 白楸

鴨

鴨目もる河中央の月をさし
 鴨のきり物二毛に子にり
 日の公やのれとりて鴨の長
 ちうくいさうくもて鴨の長
 鴨うくや夜の本履みんあれ
 かの人の鴨にんくくメカ
 三人て一本傘や鴨のきり
 鴨うくや桐実たるまむか
 夕風や浮森をさるんれ鴨
 蹴気あつたをさるんれ鴨
 月の夜をさるんれ鴨のきり

葉左
 菊明
 標也
 乙直
 葉也
 旗員
 今
 祥東
 可那星
 送差
 乙二

吉井のそれたおてや鴨のそ
訓うききとらるるあれ池の鴨
約ふれうこく鴨よる鴨のそ
覽や松のうちそ鴨のそ
めらあま小おれはうや池の鴨
着くや鴨によここくまのそ
鴨羽白あは光のききあや
鴨うくや松と池のすにきて
子を抱ておえややはま葉の鴨
よそ別た周の面や鴨のそ
鴨うくや松のそとさるこや

△
吉井
寛松
岸池
漫
松岡
阿量
筑前
流為
城段
博平

小鴨

明張る池はらんさふ鴨のそ
去りくさふれうり鴨のそん
杭芦と喰ぶる鴨のりるや
鴨うくやありかあこし春の氣
ある時、おけすさるた池の鴨
春の岸を、流れ別くりあ鴨
鴨うくまてたお子池の良
心凡そそしじさや鴨の良
置にわれもさるあはく小鴨や
湯にすく葉のそ引あ小鴨や
鴨の中とけあさる小鴨や

△
岐東
持慶
持卿
一水
文翠
英助
佩心
左弁
覽長
花縣
橋中

題叢冬

沈鴨
冬考

小鴨もよきしとわ初
子多鴨中を流し小鴨
凡そよきも法のおの小鴨
月星をさげてたある小鴨
沈鴨やそかく流る子の上
まろくや一昔切うや瘦男
坐して古のくさくさと見たり
まろくは書うふむくまろく
まろくはて一戸を流しとの中
まろくや流しとてお流のうん
まろくも一むとれて意とれ

道十左
白糖
白
子崖
標
白
尋
保
今
素
大

礫してとよきと人のおわ
美流梳てみかわいやおの素
まろくもよきと流しとの池
まろくは流しとれはまろく
お流の押へつるまろく
まろくもよきと流しとれは
まろくもよきと流しとれは
まろくもよきと流しとれは
まろくもよきと流しとれは
まろくもよきと流しとれは

雲
恒
標
尺
冥
武
子
何
女
原

題叢冬

水 鵲

鳥 鱒

去々乎中流て底ハくはれとも
 去々乎此一鵲居る一と相見
 去々乎一鳥居る一と相見
 鵲のあひ控男の心也とそり
 教多く来てとて一の湖へ来たり
 去々乎平らぶおのの教るも凡
 去々乎の平れに渡りてとそり
 去々乎入江のそりてそり
 去々乎一鳥居る一と相見
 去々乎や船に業をほそふ女
 去々乎や荒原越て小田の原

去々 寄書
 去々 素共
 去々 龍左
 去々 敬心
 去々 心跡
 去々 江川
 去々 下原
 去々 三止坊
 去々 丹後
 去々 鳥次
 去々 参市
 去々 会
 去々 園史

題 兼 冬

去々乎の巴にろりて 錦れりり
 去々乎やさすらん 百とちちそむく
 去々乎に人のほれおのそりつむ
 去々乎の巴にろりて 錦れりり
 去々乎や鳥居る一と相見
 去々乎のあそりにけりや他のむ
 去々乎のあそりにけりや他のむ
 去々乎のあそりにけりや他のむ

去々 櫓
 去々 一子
 去々 送書
 去々 雲確
 去々 鞆風
 去々 奇倒

多きの成りしを平を三日
 多きやちたしうらふむの事
 多きの産人産る夕
 多きや日の下にさきうし
 多きの花はたしむれ多の上
 人多し一人にさきうむ字多
 多の人多き字多とありあり
 本免や折れさきうて日
 本免のさきうしむれさきうし
 多ゆきのさきうしむれさきうし
 多にさきうしむれさきうし

廉古
 遠去
 吟多
 允良
 春明
 可然
 午植
 士助
 瑞塔
 冥
 卓池

多
 多
 多免やさきうしむれさきうし
 多ゆきのさきうしむれさきうし
 多にさきうしむれさきうし
 多の産人産る夕
 多きや日の下にさきうし
 多きの花はたしむれ多の上
 人多し一人にさきうむ字多
 多の人多き字多とありあり
 本免や折れさきうて日
 本免のさきうしむれさきうし
 多ゆきのさきうしむれさきうし
 多にさきうしむれさきうし

兼親
 日化
 柳花
 園更
 百明
 覽
 白
 蒼
 然
 恒
 擗

題叢冬

松林にむらもつれすまをい
跡にむらもつれすまをい
勢急もつれすまをい
木は巨の勢もつれすまをい
大つれすまをい
介勢もつれすまをい
みさといこけいすれすまをい
はたれ口を考いすれすまをい
こすとい火傷兒よつれすまをい
葉と考れは松林に葉よつれすまをい
松くすれすまをい

成貞
丈左
連勝
道亮
月化
一葉
号笠
木海
葉首
宗人
松侯

〇四十五

ちげハコを素くちく
急れてもつれすまをい
文子つれすまをい
こすとい松や一尺大つれすまをい
勢急の葉売つれすまをい
小坊をのいもつれすまをい
あつれすまをい
二つれすまをい
おつれすまをい
ちつれすまをい
はつれすまをい

了和
秋長
米彦
松老
金境
女
彦
松侯
右民
嘯二
石彦

題叢吟

花はぬのりもさかるともさかるとい
 義はたつと若く人をもさかるとい
 こそさといひが徳いとよりさか
 慣ある美をさかるとい
 学や若く美をさかるとい
 さかるといひが徳いとよりさか
 さかるといひが徳いとよりさか

仙友
 上人
 六株
 一葉
 桂川
 可菊

俳諧貴白題叢巻中

椿丘古詩輯

春
 春はたつと若く人をもさかるとい
 こそさといひが徳いとよりさか
 慣ある美をさかるとい
 学や若く美をさかるとい
 さかるといひが徳いとよりさか
 さかるといひが徳いとよりさか

春
 春はたつと若く人をもさかるとい
 こそさといひが徳いとよりさか
 慣ある美をさかるとい
 学や若く美をさかるとい
 さかるといひが徳いとよりさか
 さかるといひが徳いとよりさか

春
 春はたつと若く人をもさかるとい
 こそさといひが徳いとよりさか
 慣ある美をさかるとい
 学や若く美をさかるとい
 さかるといひが徳いとよりさか
 さかるといひが徳いとよりさか

春
 春はたつと若く人をもさかるとい
 こそさといひが徳いとよりさか
 慣ある美をさかるとい
 学や若く美をさかるとい
 さかるといひが徳いとよりさか
 さかるといひが徳いとよりさか

題叢巻

芝流歌尼世

とくふのそり合にうるをふか
深層も森はうらんをふか
るうりて一日持入をふか
森とて新芽れをふか
わりとて暮るやをふかの松の流
脊伸する森にをふかの松口か
目にはくはをふかの子孫か
山抱子のをふかをうりて暮る
破籠のしり白くあをふか
白紙に捲の白くをふか
白くをうりて流に浮世の飯可ふ

道流
今
塊
寛松
渡物
瑞了
念谷
如山
可廣
拍翠
寺村

葵 壺

白くをうりて人にをうりて
白くをうりて椀のうりて
白くをうりて小舟にをうりて
くをうりて先づの流に流るる
白くをうりて先づの椀のふ
白くをうりて流るる椀の人
白くをうりてふくの人の人
白くをうりて灰吹き工白く
葵杯をうりて流るる椀
葵杯をうりて流るる椀
くをうりてをうりて

東
伊波
新流
護物
寛松
槐園
渡物

題叢冬

禱 忌 禱忌や子の字履とる親心

子也

市火焼 市火焼や夫も中りくそる良

一草

吹草系 吹草に穀の遊治やもまわ

一草

子 子 子多や秋代の前飯思し

和山

子 子 子多にまねん料松の指

道彦

子 子 子多にまねん料松の指

不記若

子 子 子多にまねん料松の指

几童

子 子 子多にまねん料松の指

二柳

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

子 子 子多にまねん料松の指

題叢冬

世とくまに換の巾や里糸糸

世と

素に昇一兒にあらなり里糸糸

素に

学う関てたやそり里糸糸

学う

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

そ也忌 そ也忌やそりそりそり

そ也

花に花を右に右に花あり
 本より一の坊主あり
 男と女とあり
 花独の女にあり
 花の女にあり
 先よりあり
 川添や木履はあり
 花にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり

花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花

花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり
 花の女にあり

花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花
 花

そのとく一やまふきて法
あれふけん位子片いと法
抗罪一抗れ善は法
丁物の中をのさく法
よまふは花に死ねる法
法一あまふたふまふに
法一美はてふれまふ
まふは抗ふは抗て法
法一ふありけるまふ
法一昼のれは抗て
心道やまふ曉の法

瓜 一子 蒸れ 新開 道亮 合 号 集 志 境 提

〇五十

題叢冬

あましく横良尼て法
法一秋のまのれまふ
別まのててもは是法
右の底たいてまふ法
法一花にハ法
法一刺て透るる法
法一暖にまふまふ法
法一美はまふ法
法一まのまの法
法一法
法一法
法一法

寛松 彦人 瓜 菱 竺 桐 布 席 應 了 介 合 著 井

海川夢の浮橋をりりり
 二序之夢の浮橋をりりり
 ころしきんふふふー海川
 扶園を毎毎にふふ海川
 海川をふふふふふふふ
 海川をふふふふふふふ
 大師諱 孫宜殿をりり道安や大師諱
 海川をりりやふふふふふふ
 海川をりりやふふふふふふ
 赤くとふふふふふふのふ
 赤るとふふふふふふのふ

乳築
 平菜
 在肩
 海川
 露日
 富噴
 道差
 産平
 一方
 園子
 曉意

雪をりりやふふのふふ地につふ
 雪をりりやふふのふふ地につふ
 人を足て又候りりふふのふ
 候りりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ
 雪をりりやふふのふふのふ

携元
 白境
 宗鏡
 保吉
 今
 感書
 牛入
 巨丸
 兼光
 秋葉
 菊二

夜子のうけもたのこそ家の子
山里や子を遊ばむ家の人
心もたもたもたもたもたの枝
おまもたもたもたもたもたもた
芥子のぬに湯うぐもたもたもた
家の子もたもたもたもたもた
おまもたもたもたもたもたもた
むつりぶつらもたもたもたもた
大池や来たもたもたもたもた
大室といひてあるやまのた
まらもたもたもたもたもた

瓜 祥 真 隙 道 今 養 子 素 漢
瓜 祥 真 隙 道 今 養 子 素 漢

集る所く大にふる家の子難か
古来にのれは家の並やたもた
家のまもたもたもたもたもた
家の並の並の画より花も
鴨宮一人もたもたもたもた
もたもたもたもたもたもたもた
松の並や一室もたもたもたもた
もたもたもたもたもたもたもた
もたもたもたもたもたもたもた
海老賣のまもたもたもたもた
もたもたもたもたもたもたもた

年 池 菊 松 小 籠 布 壺 喜 史 阿
年 池 菊 松 小 籠 布 壺 喜 史 阿

題叢冬

雲 隼
伊豆 美砂尾

たきし一借にへんきり考の書
止心凡々書の冲越に杭さく
朽し書の体しおりの下流の書

ね 五

おれたかりて残きくくせの夜や
見歯奈し蕨殊七書の止か
お書やより序一娘くさる星
就にはく松をし書の板板か
旅人の持し一筆より究の書
お山や凡し杭七書の 下
お書や草帯によりなる根 根
お書や中読るる書り人の手

右 対 一 松 大 蕨
左 山 字 兄 江 右

井 玉
白 年

お書や求食てよとに読の後
お書や座の志も深しかり
せろろ魚書うくく下書の書
お書は杭起りる上 産 巴 有

書 五

けやくと柳の書の板板か
お書はて崖れそとに竹板か
お書のおやわの子のうく板の下
板に小るの書さるる書板か
序ふくと書れぬとて書板か
書の板の嵐事て心杭うん
うろりおれ三年の巻七書板か

籟 籟 牧
存 亜

成 摺 恒 摺 成

題 叢 冬

家のおや天の河をさしきり成り
 下ふしうらぬ東より重七あり
 瓢の香を家におはれと出りたり
 色角の雲のうらりと重七あり
 枕蓮を叩く風をさす重七あり
 せんくと重七あり重七あり
 鶉はり起て流るゝ重七あり
 重七ありの二万あり重七あり
 月のをし重七あり重七あり
 船に乗りこしりいれ重七あり
 流るるしりいれ重七あり重七あり

可成屋
 道彦
 尊堂
 寛松
 玉屑
 葵子
 戸人
 白塘
 于菟
 高頂
 秋良

家 滝
 滝つゞれおれり重七あり
 滝の香を家におはれ重七あり
 唐土より重七あり重七あり
 重七あり重七あり重七あり
 鶴のつゞれおれり重七あり
 やさしく重七あり重七あり
 重七あり重七あり重七あり
 葉子葉に重七あり重七あり

松江
 牡丹
 柳紫
 岡更
 白杖
 白杖
 白杖
 秋良
 秋良
 秋良
 也者

題叢冬

そのあり 篠をまはるの熟なる
其秋のありしを志すやをりま
いはるはるその物くれ
解ふ無きふたりその中
跡ろくや又跡ろく井のそ
その人ぬるとろくろくわ
る市や小割さへるその上
るにふれふはよ作の物そわ
その物くくればらと見て鳴ぬ
牙のくろのよま入そのそその
そそろくや篋心ふく盤の尻

白朧 芙蓉 几董 感吉 跡石 了孤 大に丸 存亞 恒丸 瓜

〇五十五

ふくれけりそやうろそその物にくり
跡ろくろくろくそその物にくり
柴のそそりし来て火を煮つけ
掃ありとそあけてそその物
老たりとそそおりのそその
そのそその物にくりそそそ
跡ろくや又跡ろく井のそ
松一本たのむくそそその物
そそその物にくりそその物に
そそそそそそそそそそそ
天地のよま入そのそその

能者 喜川 希言 才左 松也 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜 瓜

題叢冬

積る雪を花よりあま度ふや
魚喰や口をささぐ一豆の雪
片やうもたれくみくそをの人
まきれハ麻焙るや雪の片
白雪や子星の隈にゆい
雪の宿不長をいさやうそん
雪玉れの雀ありうり國の井
白雪の情しつあつはせむ
大名にうりそと名く一城の雪
ゆかちん世をいといん雪のつ
雪の白やゆいふ家のあきん

星布
城片
今
上雪
可動星
雪三
展勢
振勢
南
長
道亮

夏売にゆいや物も雪のり
雪の人をうり改とれ情こ
おのふまてんぬ雪のまや度のを
あは涼の白雪あはるうれ
雪好といハ榮耀に園をり
ふれハ別くそり雪の麻
山人の雪ん看んまの葉か
ありうりま雪の情世や情の雪
雪の雪んは時くうり人よ来ん
雪の情よるあはいてんはる
とく起てま井う小若雪をそく

今
白
春
尺
尺
麦
平角
楮
峯
然
長

ひつづき忘りある。之雪の流
挽折て足れおをほし雪の兼
そとへ鳴きや小雪のこころ
追たてて松きてやん雪のち
雪白くむくくとおれ光と重
やあつと浮世へはくそ雪の足
まよとの子難ねまより雪の指
凡の雪おれよあつと吹くね
白ゆやその忘する雪の中
雪はよまよそのく木の竹井の流
魚妻火をよまゆり雪の心

雪笠
雪花
寛松
雪白
少女
座人
今
共重
秋奉
卓代
漫く

海山はまきりやう雪のあ
あつとくもあつと雪の小流か
人うつて垣始れ雪のこぼれ多
まればや葉火にゆき雪のま
雪はきり人にむかひてははたり
流雪のやぶられさう雪の流
足あつとや人もる流と雪の人
雪の折りされるやん雪の流
南天の雲とさる雪のふたわ
雪の白やゆり流るる流るり
足雪くまれば人の雪の足

雪原
北原
双樹
流為
大高
木老
尾原
菊村
紫明
文魚
阿亮
雪原

後まのちのへい雪はちるまのた
 ころれは家になでさへ雪のり人
 人に来てよまうさう雪のち
 かに来はけ振舞ん雪のり人
 葉とれは飛鳥えんや雪のち
 雪のりやおんれらさる人の鳥
 花ちるは鳥さうりや雪二り
 柳とてうとうぬ雪のすゝのわ
 くはうり雪はぬにり雪とち
 といわや雪の旦の雪り
 木の雪ふるおと小片はさるの雪

陸奥 和崎
 東葉 洪園
 尾花 龍亮
 女 文夜
 播磨 葉来
 後河 石種
 女 苗麻
 成妻
 入明
 尾城

雪や嵐は雪はらふれれて
 雪の初は世のるるくもわ
 初の雪ちるさうさう雪ふる
 子とれは雪とけりさる雪の雪
 四才くさ日大さす雪の旦わ
 左めやさうりしつれぬ日と雪
 さりさや二度は雪の初ぬる
 むく起に雪ら雪丸げさる雪
 時ちつたぬれは雪の卯心わ
 雪のれいりは雪さる雪の初
 富士の初雪の跡さう初雪の雪

土 為
 華泊
 成員
 岳始
 妻繁
 嵐卯
 又芽
 菊也
 白考
 麻景
 南浪

題義冬

勢既にさくたれんすその雪
 鳴りて人海に雪の且わ
 これは雪の勢ゆるし雪の上
 川の幅凡そさうり雪の勢
 雪の上にあるまのてハ旭 中
 雲や海の上ハたつ 雪の松
 口とふたにある事さうり雪の勢
 雪りりそめは流され雪の夕々
 雪の勢ゆるし雪の上
 雪の夕々もさうり雪の上
 雪の戸れるの扉をさうり夕々

勢既 双鳥
 尾片 木天
 下流 一岳
 指原 松日
 止石 星産
 公羽 湯屋
 黄右 黄右
 黄村 黄村
 黄村 黄村
 黄村 黄村

雪りりそめは流され雪の夕々
 雪の勢ゆるし雪の上
 雪の夕々もさうり雪の上
 雪の戸れるの扉をさうり夕々
 雪りりそめは流され雪の夕々
 雪の勢ゆるし雪の上
 雪の夕々もさうり雪の上
 雪の戸れるの扉をさうり夕々

存 亞
 士 尚
 成 員
 一 子
 魯 臨
 養 守
 漢 物
 黄 村
 黄 右
 黄 右

題叢冬

白 几 董
 白 几 董
 麦 薺
 保 吉
 大 江 凡
 恒 凡
 五 管
 来 以
 长 翠
 成 员

白 几 董
 白 几 董
 麦 薺
 保 吉
 大 江 凡
 恒 凡
 五 管
 来 以
 长 翠
 成 员

孤獨下まけるし雪のひまを
大をふりとりおれ武士
雪の舟日にぬれてぬけり
雪の舟をさめて今風情を
雪を折しつゝうき舟の影
雪をわたりも木の葉をふりまめ
雪も折れ雪よりこぼれぬ
雪折しつゝある雪の霞やうや
雪のまたのしづの小松か
つむぎの上にかささつと日ぬや
雪の折れ日ぬやとさう雪の上

源実 園虎
伊豫 子風
白園 士
瓜 夫
妻郷
桂堂
万和
萬石
女 志守
新 知

大やうに雪のいつやぬれぬ
日雪とりまきもいひぬやわ
雪積てふりまき日ぬやわ
白雪の霞ありたると日ぬや
雪雪の人ふせまきと輝とたて
白雪の雪りふふれぬ美まき
折れぬ雪のいつは雪の雪
松凡を押しつれぬ雪をわ
大雪や豆又人海角力元
雪の雪又一尺のうきぬ
雪産に人鳥足ぬ雪をわ

その 兔園
尾張 牛来
一 如端
文勢 宜
権 宜
白 籠
恒 丸
松 佛
万勢 宜
成 員

題叢冬

大寺やおにんぐれて子 祝
大寺の上になまじりる日くれ
深きものえりたりも都のこ
大寺やふらふらりたる祝の良
常つむや尋のきつゝゆるま
おくるこゝろのまきふむいゆるか
つりてきくわん物 わ
心室のふらうらふゆるか
つむきのあふもいれんあわ
うわつと漂ふまきのいれわ
ふれおれの終にまきつゝい田わ

仙山 雲流地
野秀
定鏡
木海
孤山
大如 捨差
指す 梳成
指は 紫鳥
下弦 菊水
感喜
終石

心人のいへる祝をそ終れり
心院や日を抱ふるきのあ
きこのきえてなけ傘のあ
まきやにききのきこ足らん
さいつてもきこけ之あ 心あ
波きの心心橋ハきくあれ
百のまきまきまきの心あわ
きこの款ろくもやきの充
あふりや海へるむききの心
大やれきのふりあれ心あわ
きこの心越らんれりあわ

鐵船
斗入
喜感
士仍
乙二
魯流
田人
号笠
瑞了
武彦

野	林	谷	事					
野	林	谷	事	雪	雲	山	崖	高
野	林	谷	事	雪	雲	山	崖	高
野	林	谷	事	雪	雲	山	崖	高
野	林	谷	事	雪	雲	山	崖	高
野	林	谷	事	雪	雲	山	崖	高

原	海	浦						
原	海	浦						
原	海	浦						
原	海	浦						
原	海	浦						
原	海	浦						

題集冬

島

常

漕道てりいづれを常の赤

赤

温

常

常

赤の川せに曲らぬまのり

陸

美

川

常

赤の川せに曲らぬまのり

長

翠

に

常

赤の川のふへ花り萩

年

人

星

常

古星や葉おハ赤れ如妻

梅

月

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

縫

喉

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

未

光

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

梅

庄

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

人

公

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

白

権

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

布

衣

座

常

赤の川せに曲らぬまのり

長

翠

題叢冬

吹 免 吹
めおそれと作られたや幸仙
扱る月夜に瘦うつそきき免
有りきと刀投出れき吹か
ひきりてやりてさるるの候
やよき免羽の松風をえんか
定きやもよきや幸吹のやま産
ふきあれぬやかりみふよか
記好
保吉
乃亮
保吉

車 岩 虎
花九つふふふささるらる
記好
嶋丸

車 岩 虎
虎の月を影も控へやそら上
記好
嶋丸
保吉
乃亮

水 恒
お車引の詠とてあや星のわ
記好
嶋丸
保吉

水 恒
お車とこれにひねりてかきぬ梳り
記好
嶋丸
保吉
乃亮

水 恒
美お車やあの上の扱小あ
記好
嶋丸
保吉

水 恒
歯齧に春のおまき心お水
記好
嶋丸
保吉
乃亮

水 恒
下戸の志しお水下のあは味
記好
嶋丸
保吉
乃亮

水 恒
鶯の唄にわすれゆく菜原わ
記好
嶋丸
保吉
乃亮

水 恒
鳥て序のる序のりて遠れに
記好
嶋丸
保吉
乃亮

凡抄の本を引よるに房りか
大島の紫以にうしし抄わ
石に中あり高きおて碎る粒
系おハ抄をつる守ありわ
楸の根まうもあらうう厚抄
木の葉を凡や抄は秋の白
子の戸や小田の抄はうう
五葉のうもよあを以厚抄
之厚くと家物のよを以抄わ
栂の書は落る以之厚抄
いへるう家物の餅をて抄わ

紫花
全
遅
成
全
完
展
真
道
美
美
人

りあハりありて厚あり
抄屋人目にくるまのまう
追ひこまは家物のこま抄わ
抄のすりう抄わ
厚のこまうて落る本房わ
薄抄やあをの下の厚うし
考うたきまをむ抄わ
ううたけん瓶より扱る抄わ
張紙や抄はうう本房
たうまてまはも抄う厚抄
貝表のひううに抄わ

守
従
秋
箕
星
持
文
雪
守
三
志
水
笠
磨
磨
雪

願叢冬

此よりろろあてあへる	少	氷	星	水
江の底の氷踏むる鳥	氷	系中や木こいたるは	教の子のまや嵐は	湯あうらつる
大和	陸奥	下	上	下
林系	佐橋	杉	杉	杉
吐	不寒	紅羽	白	白
日	日	日	日	日

葉よき人もあに	氷	氷	氷	氷	氷	氷
焚立て浪井	氷	氷	氷	氷	氷	氷
大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和
南	南	南	南	南	南	南
白	白	白	白	白	白	白
白	白	白	白	白	白	白

題叢冬

粟

粟の凍るるを恒徳か
 粟凍てうるる粟の常か
 粥凍に押す子の小菖か
 凍る粟や一息つゝの凡のき
 木も子もを凍るや粟を鳴
 古代に子履況にや 粟か
 昔の在るはにをぬる 粟か
 口をくくをぬれにぬる 粟か
 こそくや魚の骨を心育か
 人こそくをぬれにぬる 粟か
 こそくや粟にぬれたる 小菖か

保吉
 人
 漢為
 古卵
 梅唯
 蘇村
 蘇左
 白権
 保吉
 蘇為
 道亮

粟

粟の凍るるを恒徳か
 粟凍てうるる粟の常か
 粥凍に押す子の小菖か
 凍る粟や一息つゝの凡のき
 木も子もを凍るや粟を鳴
 古代に子履況にや 粟か
 昔の在るはにをぬる 粟か
 口をくくをぬれにぬる 粟か
 こそくや魚の骨を心育か
 人こそくをぬれにぬる 粟か
 こそくや粟にぬれたる 小菖か

蘇為
 常益
 蘇松
 蘇為
 充物
 蘇為
 蘇秀
 古卵
 柳流
 蘇為
 瓜

題叢冬

一志あり久獲の尾る愛か
未幾便母う端と礼進う
園の戸や愛片しう猿の上
茂る葉や愛真する於於
小柳を空に思ひて波はれ
鶴鶴の尾にやるとれは愛か
まじくと冬の底ある愛か
よ愛さくあゆむる海に
波やんでれ忘するあはれ
くこれハ時をゆく愛か
乙子とこのこたけある愛か

〇〇
六十九

宿るしておけりるけやむ愛か
未幾ふる書のおもふ子ハ片し
旅より愛を思へる愛か
朝んを丸呼ぶ子のよものれ
とありくの波やうとふは愛か
よ愛葉の小舟も連て来ぬ
ひしとら大葉そり愛か
くれこれと木立を下る愛か
松をよん愛をささる地くれ
たくれと波音ふお愛か
豆売をたておけりう波愛

題集冬

尋村

瓜

園

白楳

保吉

梅人

士

今

子共

一子

乙二

瓜

道亮

志由

日人

日記

一葉

夢

彦人

権

梅

文角

園五にそくりたる書 抄 得 有 城
寺に於て入るや 蘇 山
さつとと學のむら 梅 松
梓がく人のふさ 葉
けりふそよるふる 葉 松
そこの言合の是の 俾 三 方 明
糸の浦つゝえり 其 の 白
その言あまりむと 行 公 長
その言 烟 も 出 ぬ 戸 口 水
雲のつとさくあて たる 其 的 言
ひりたりや 其 的 言 行 公 長 的 言
梅 山

き 雨 雲 一 寺 入 たり 人 其 的 言 白 燈
梅 山 其 的 言 行 公 長 的 言 岳 松
字 志 其 的 言 行 公 長 的 言 岳 松
其 的 言 行 公 長 的 言 岳 松
煮 水 煮 水 煮 水 煮 水 煮 水 煮 水
雪 海 音 雪 海 音 雪 海 音 雪 海 音 雪 海 音 雪 海 音
美 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也
美 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也
妻 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也
吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也 吟 志 也

年り喰はより蕪一女也
 形様す人喰はんき馬
 下部等り斬ぶる之美喰
 美喰お存つれされ人懐く
 業平ハ男より美喰
 つれく此字然も凡十や美喰
 撮一本持てくも美喰
 ころくと刻考きく女子肉
 よんまの字本れきく女子肉
 さありの樂なほるや美喰
 菊の花葉おさるすはゆわ

西存 竹圃
 止口 芭剛
 几董 友國
 擲哨 花桂
 松董 十土
 藤垣 芸お

眠 孫や世と前幾の心くさぶ
 あくや中君れぬれてきの上
 気付や云片くさむしはりた
 梅子折るは家寄も芽いぶ
 水 鼻や鼻さくゆ樽の上
 標 元しとれ家りハきくうりや
 城うや核の左に星光
 有 仙 有他やよりくおに生れつ子
 有他ハ名さんつめう光り
 有他や賜の字董花咲ぬ
 有他や根に白玉のきれハ光

大石凡 保吉
 戸山川 不知名
 丹后 白燈
 女子代 瓜
 葛村 葛右

題兼冬

有他の葉を喰ふ虫もあつたり
有他や平小と咲てあはれは
有他やそれの葉にありて先
有他は葉を食ふ虫もあつたり
有他は一度も見た物葉が
有他や大仕合のつくり
有他は片しめ終り此やそれ
有他咲て折れ枝さう有他花
有他や平餅を食はる葉の中
有他や麻上下の草を食ふ
有他を了の喰ひ葉を食はる

秋鳥
存亞
道瀆
兼年
一子
一葉
寒松
唐人
菊也
雨考
書貞

菊

有他は葉を喰ふ虫もあつたり
有他や風の葉を食ふ
有他を刈る平小のいなま
有他はそれの葉を食はる
有他は葉を食はる虫もあつたり
有他は葉を食はる虫もあつたり
有他は葉を食はる虫もあつたり
有他は葉を食はる虫もあつたり
有他は葉を食はる虫もあつたり
有他は葉を食はる虫もあつたり

女
麻
終
恒
百
葉
古
席
下
山
武
女
麻
終
恒
百
葉
古
席
下
山
武
女

石菖花

さき葉に折れぬ葉は浮世か
さき葉の力を入れて咲にきり
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花
咲へ下り打りてあそびつきの花

宝珠梅

宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち
宝珠梅と来ては藤花をよのち

早梅

早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は
早梅や春をむすぶ花は

梅

梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花

題兼冬

梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花
梅 春 花

つらつと餅たねをそとるまじり
ふく人の心を折るまじり
海人や折れぬあけぬまじり
ふくまてふまじりぬるまじり
花のそらるまじりまのふく
浮きりしるまじりあうまじり
をうしやるまじりねほまじり
周のお花決心にうるまじり
浜の風をこ梅の一枝をまじり
組板にあえぬあけぬまじり
海士の子を折るまじりぬるまじり

白糖
吉産
保吉
士朗
全
完来
若三
祥禾
廉古
一学
月尾

〇七十五

飯

とらぬまじりまじり人に作す
二つ流してまじり桶のまじり
折れまじりのまじりまじり
折れのまじりまじりまじり
しら流のまじりまじりまじり
今まじりまじり飯のまじり
まじりのおまじりまじり
秋風のまじりまじりまじり
飯のまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
智恵福恵中入たりまじり

星
座人
杏池
善祥
角米
覽念
差打
全
全
白糖
大江丸

題叢冬

純の齒やをさくしう喰ひり
 飯喰ぬ人と寫生尼ぬ人惡心
 ちけのあそび百金の徳が
 旅人かあるんちう秀々たわ
 君り代は誰しうさうりちけ
 河豚毒のこはまをさかた地
 純うれてさかすの網りあさ
 こはいまの居しうさうりちけ
 河豚のつう悟しうさかたさ
 さう梅の春さうさうさうちけ
 誰やうにさうかすの月ちけ

存 亞
 至 厚
 布 糸
 兼 規
 成 員
 一 人
 道 彦
 今
 芳 老
 養 子

虎さうの息を喰ひぬるさう
 又十さうさう美味さうさう
 飯直する人のさうさうさう
 控られたさう飯のさうさう
 さうさうさう母は徳さうさう
 自さのさうに老さう飯の飯
 飯のさうさうおのさうさうさう
 飯のさうさうおのさうさうさう
 相比さうさう徳さうさうさう
 飯のさうさうさうさうさう
 さうさうにさうさうさうさう

一 糸
 今
 尺 丈
 奇 剛
 万 池
 護 物
 杖 長
 米 老
 折 袋
 玉 珂
 江戸 明 良

願書冬

緜

緜

あはるく我を休むるの園にあり

護物

緜

いふやや緜緜にむふあふすま

自禁

山嵐一この跡此の岸にわ

葦村

曉や緜の吼る音の海

曉音

乾 緜

緜

去依る画のふり種もあゆみ

長島

緜よるるに松葉をたたく山嵐か

打之

唯の遠近より緜に鳴きあり

二鶴

うさげや心あて見たり山嵐

等鬼

かゝ緜に腰すゝる大嵐か

葦村

うら緜や帯力風の音も

公

うら緜やまの木の片ハ醒し

周文

乾緜の口ハむすはぬとあふれ

白権

題叢冬

うら緜に小町の果てむすはる

保吉

うら緜に名刺の付るうら

几董

うら緜を帯のよにそへる

彦厚

うら緜に風はほくくたのこ

法昌

うら緜不思焼くしてわし美

善三

送彦

日化

嵐所

護物

〇七十七

うらむをさしむぬさる氣か
 うらむや昔もさしぬ鼻をひ
 うらむや植たる花も咲さる
 いさゝたるきや冬もくさる
 荒坊の瀬もさるさるわ
 くさるわる老や其ままは日
 杜夫多良坊まのすさるさる
 うらむは獲ぬさるぬれりか
 かうさるのぼろさるぬれりか
 魚極やうらむさるさる
 魚し来るさるさるさるさる

伊勢
左 湊
花 村
麦 洲
元 鳥
雲 雀
白 雀

紗

牡 蛎

杜 夫 魚

雁 子

雁子月にはさしぬれりぬれり
 たるはぬれささるぬれりぬれり
 然る雁のこのぬれりぬれり
 雁子物や若さるさる武志さる
 砂川に改中吹たる雁子物か
 雁子物やさるさるさるさる
 雁子物やさるさるさるさる
 雁子物のぬれりぬれりぬれり
 雁子物さるさるさるさる
 雁子物のすんでさるさるさる
 雁子物さるさるさるさる

美 丸
平 角
美 左
公
大 江 丸
花 露
砂 洲
乙 一
学 堂
奇 園
周 子

雁 子

爪たてぬんかあらぬぬあま
 右の羽左にすゝんぬゆあま
 人中人をあらぬぬあまの暖
 世代中を案まろく座の暖
 暖より暖人のあまり入
 業しるふ海人飛たり暖
 東より飛たりぬぬあま
 机よりつゝる保より暖
 うかきよれろくくあま暖
 暖はるあまのひあま暖
 帆柱に飛あまろくく暖

〇七十九
 左 右
 保 吉
 今
 大江死
 麦飛
 年人
 不 求
 後 物
 肥 子
 又 暖
 元 末日
 麻 是
 少 女
 子 子
 尾 信 中
 基 村
 雲 呂
 丈 五
 南 五
 後 物
 全
 伊 賀
 車 素
 兄 直

多 咄
 多 荒 多
 追 多 物
 力 子
 教 子
 多 房 子
 勢 巢

若大をぬすそのく路費を暖
 世の中を不之れぬ暖
 多るけなやまのあまの
 菓子あまのあまのあま
 追多代房あまのあま
 追多代房あまのあま
 追多代房あまのあま
 力子 机よりつゝる保より
 教子 何れぬぬぬぬぬぬ
 多房子 机よりつゝる保より
 勢 巢 かくばり松練ゆつ巢の机
 かまばり巢もかくばり巢

麻 是
 少 女
 子 子
 尾 信 中
 基 村
 雲 呂
 丈 五
 南 五
 後 物
 全
 伊 賀
 車 素
 兄 直

大根皮

山ハ何ヨ大根ハ之ヲクモハ如
引テ心大根ノ皮ヲ取リ
凡ク見ユ吹テクモ大根皮
大根リテ根ハ引リ取ルヤリ
長明ノ事モ根ヲ取リ大根引
上ノ藤ノ皮テ引レテ大根引
勇心レクテ引リ取ルヤリ
之ハ皮ヲ取ルヤリ大根引
鳴雀ノ大根モ之ノクモ
物ノ心クテ取ルヤリ大根引
物ノ心クテ取ルヤリ大根引

也
有
白
几
成
一
遊
一
考

苳

大根引葉ハ心モ取テ作ルヤリ
引
良ノ力係ル根引
松ハ葉ヲ引テ取ルヤリ
美人ノ心クテ取ルヤリ
クモ引クテ取ルヤリ
大根引葉ハ心モ取テ作ルヤリ
根ハ葉ヲ引テ取ルヤリ
美人ノ心クテ取ルヤリ
クモ引クテ取ルヤリ
大根引葉ハ心モ取テ作ルヤリ
根ハ葉ヲ引テ取ルヤリ
美人ノ心クテ取ルヤリ
クモ引クテ取ルヤリ

苳
女子代
素
寛
荒
菜
薺
白
苳
有
一

子

菜

大根引葉ハ心モ取テ作ルヤリ
根ハ葉ヲ引テ取ルヤリ
美人ノ心クテ取ルヤリ
クモ引クテ取ルヤリ
大根引葉ハ心モ取テ作ルヤリ
根ハ葉ヲ引テ取ルヤリ
美人ノ心クテ取ルヤリ
クモ引クテ取ルヤリ

苳
女子代
素
寛
荒
菜
薺
白
苳
有
一

題叢冬

葱

山の戸下や菜けしに角
葱をて林木の中を詢わ
葱より尺周れやうぬむぶら
つあつとを播りけたり葱の
わつ汁を中へそのろりし
小式約ふらうも尺根採細
人中へ地をうりわつ汁
葱りしをよのをけらるる
花を此ひしをぬらうわつ細
葱細をうけして葱根採わ
孔子尺の葱あり常の坂

武考

吉百
甚村
甚清
鉄松
保吉
士領
双樹
道亮
岳輪
序人
高路

浅

漬

浅漬の菌に遠過る男わ

菟右

風

吹

ふらふらやわらふんを

大卵

納

豆

軟くは実ぬに剛なる納豆汁
入道のもをさうりわ納豆汁
らうらうやうて実を交ひり
人も合器もすり凡てを納豆汁
おまこころ心構れぬや納豆汁
花をらる樹はすうやを納豆汁
らうらうに古実をさうり角葱

考

夏権

甚村

牛心

道亮

貞虎

甚清

平角

題叢冬

佛徒費白粉叢冬下

括上左符釋

師) 走

ふまゝさしりし昨走の考物
松風の世にまゝさしりしは守水
浮遊なるし子にぬらうし昨走水
はまらけぬまのやゆまの豫すり
百姓の枚戸及及びし昨走水
とくとと葉はくしゆま月夜水
ふ他つるまゝしるすの族水
月か度もまゝしるす未蓋水
まに及るしるすの族水 凡水

標 凡
葉 左
甚 村
月 権
梵 系
合
几 葉
保 首
瓜

題叢冬

しげき業をさしあはしたる庵わ
急に盛衰世の人に見えぬわ
丁鴨の上もさるるしげきわ
しげき見れば人となる様か
いそもいそをいそげきの帆柱
静るるまのやしげきのむら
月のあいて見ればしげきの
音もさるるしげき海大釣の糸
白をやしげきの山の影
杜の白しげきのやに入にけり
船をさるるしげきの

春 鶯
夏 丸
秋 石
冬 人
長 翠
松 堂
全
史 左
岸 花
尺 丈

〇六十三

しげきめくさるるや業が事酒を味
月々のも輝にさるるしげきわ
花さるるは枕もしげきわ
山軍れしげきをさるる梅の
豆売に豆売るるあやしげき
山里にのり輝知しげきわ
言のむらばさるるをりやをり
あやわめくさるるしげきの
飛さるる人のしげきを浦の
美草中に事さるるしげきの
木に林に花のあさるるしげきの

道 彦
夏 松
産 人
養 子
復 物
思 人
子 路
あ 之
芽 丸
漱 石
花 鳥
双 鳥

願叢冬

九 似
 二 蝶
 三 人
 可 磨
 亞 笛
 周 更
 今 大 睡
 白 檀

九 似
 二 蝶
 三 人
 可 磨
 亞 笛
 周 更
 今 大 睡
 白 檀

九 似
 二 蝶
 三 人
 可 磨
 亞 笛
 周 更
 今 大 睡
 白 檀

腕

八

仙名

寒

九 似
 二 蝶
 三 人
 可 磨
 亞 笛
 周 更
 今 大 睡
 白 檀

九 似
 二 蝶
 三 人
 可 磨
 亞 笛
 周 更
 今 大 睡
 白 檀

九 似
 二 蝶
 三 人
 可 磨
 亞 笛
 周 更
 今 大 睡
 白 檀

題叢冬

其辰のしれぬさよふと海北春
乾鐘の戸に吹あそぶさし
そよも空のあやせん菴菊
らりねぬさよふとふと
川玉中の菴流さよふ村を
りいふ入てあそぶさし
癒るをを現にのみさし
きつねのあそぶさし
たつねのあそぶさし
川あそぶさし

然あす川
然中
長吹
春鶴
保吉
会
斗入
存亞
松兄
士調
檜重
会

あつたつ流てもさし
菜畑につむさし
白鶴の井の中ゆくさし
信長のまのたさし
樽のたに始ぬさし
酒の泡をうしてあそぶ
あそぶさし
井の葉の世にさし
老てゆくさし
さよふさし
あそぶさし

会
菜兆
成英
会
尊二
喜半
乙二
会
真々
常世
会

題叢冬
月

入川の夕しは遠くを
人なりもなき空に
のちの光のれを
狭うそしき
馬羊坂の
年よりや
昔のお
川吉大
あふ
船の
そし

寛松
美多
白坂
武陵
月底
久藏
文角
我亮
美撲
月船
沙王

岸の木の
梅の
木城
そ
丁
人
そ
そ
そ
そ
そ
そ

業
陰
一
青
久
但
風
乙
一
七
靴
七
七
七
七
七

題集冬

そふおやもてに光るる原れ針
周工おはさく全既のそしお
口ましやそお夜にさく控ん
妹よりたし紙さく針の元
ふあゝあはるにさくむらさきお
折とらおはらぬちよはさくわ
まをぬつこゝろもさく一氣の突
むをぬめてさく一吐のこゝろ
松凡もさたりしるおさの入
しあゝとさく入おの首さくし
そそ凡れは兼いさくしおの肉

そ入

そ肉

花の木やおに若作のそこの肉
そ姫籠に尾さむけつ下蟹さ
そこりかまのなぬれさくお上
そこりやうこけりお動く月と
お送にありさくやそこら
白雲のちれさくありさくお
碧履のうらみ滑やそこら
まといは極まありさくお
おのねやうおぬれさくお
そこらお兼いさくお
そこら兼いさくお

そ姫籠

そ白

題叢冬

百頃 百燈 全 奇園 卜甲 子孝 維新 古新 送是 是牛 長島 若村 安里 年ん 若村 若古 白燈 存發 送和 麦凡 江渡

中戸よりぬきまのこおのりさき
 松凡とつらとられやそしふ
 てもも浮世の果をそふ
 そしふ仙子の為るはたか
 楊子うそま泣きんそしふ
 そしふ仙柳の庭にまきり
 そしふや五音魂の清らき
 そしふやあまのたるとる
 そしふや扇のたるとる
 そしふやぬれぬれ川流の

常陸
 完来
 祥来
 道亮
 景之
 日化
松原
 一鶴
 若村
 貞佐
足尾
 川
 芦渥

角力そしふ
 そしふ
 そしふ
 そしふ
 そしふ
 周見
 冬日

角力そしふ
 そしふ
 そしふ
 そしふ
 そしふ
 周見
 冬日

長高
 護為
伊豫
 芦原
 他力
 子静
 丹芽
 表表
 寛光
 芙蓉
 芦渥
 晓景

願叢冬

冬の白草一本は庭の隅にあり
つゆの腐抱下をりけり
丁の根のかさく冬の日けり
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る

袋書
書海
存正
外史
士政
長翠
今
橋堂
西也
成貞

鳴鳴を力に冬の入日か
冬の日けりしと照て多る
枝に下りて冬の日けりし
丁鴨のりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る
冬の日けりしと照て多る

今
書半
東境
乙二
道彦
号
下池
養
既
積
好古

題叢冬

水窓寒

よりありとこもるあふしをさる
鴨のさうりつ田へ子星をさる
吹くま周さいと何し水の窓
ふれるさしあふ急い寒れ寸
詩の係れ無極無極せんを筑
物くは井り乃れれいをさるり
おれんて自らんにたつたを筑
水窓寒をさるの心は勝
境はつるあふさぬるをさるり
捨るあぬまのいんよをさるり

道
今
姐
自
乃
標
葛
甚
今
院
白

冬

冬より海あのを書取に入ぬ
冬より寒火に是る服脱か
現世を寒耕の皮や冬より
冬より杖て周ぶれるさるり
やるるも物さるれあをさるり
あれはさるれいさのそを筑
冬よりあは者も立さるり
冬よりあは保娘や冬より
冬よりあは子孫や冬より
冬よりあは人さるりあは
死さるり人の話さるり

今
周
際
際
石
今
斗
今
恒
松
存
秋

題兼冬

栂大木にを築くへく旭寺守
蓮葉の先ひくくをこり
栂柳よりかきかいてをこり
空風のそあそりいをこり
葦の葉もろくはをこり
雪の人及に素るをこり
をこりそそりもをこり
をこりかひをこり
みさの素あやをこり
をこりかひをこり
りる紐子本そりてをこり

無説
天光
標堂
瓜
成良
可松堂
喜牛
一草
月流
瓜
真く

〇九十二

蓮花葉に霞を結わくをこり
栂枝や木陰の影をこり
をこりその影にまを心の白
能羅の米りくかりをこり
ゆよも氣大よりをこり
人るもくくは時ををこり
ふささるる心あわををこり
大栂のなたるまをこり
葉すれに神に凡ありをこり
赤も七もすれてかをこり
をこり心のまや袋

魯原
奇樹
一葉
寒松
府人
秋峯
瓜
桐唐
葉心
女抱郎
九似

題叢冬

雪をよつとみればありをこり

淡路 集 終

をこり夢に折く梅の花

江戸 竹 部

冬月

白地情を定めて標本床

寛 永

をの目や咄やうきを笑ひ

萬 古

をの目つらふをふらふをばや

園 史

海に女遊治の標定やをの目

白 燈

をばゆる乳をうらむをの目

伊 勢 桃 枝

をの目大目くらみし心の上

感 喜

系上に落んてぬれをの目

保 吉

標やさうらうらむをの目

恒 丸

大向東へ移代りてをの目

異しうとよむれそをの目

士 郎

あふそに剛まおたりをの目

公

さうらうと若ふじをの目ねわ

公

さうらうに海あつてやをの目

肩 山

百人うまの喰ひぬよをの目

標 堂

三百白のころあうらうをの目

公

をの目人に逢て退て静し

成 貞

梅うらうし梅と見あつてをの目

西 遊 記

ひめあつし逢ふ松やをの目

公

子廷おま那梅れ床やをの目

公

控方の宵鳴やをの目

真 子

題 叢 冬

九十三

只すまはすまそふくじをの白
 吹落すあまもあしんをの白
 井羨う井おのやをの白
 眉の目くくくをの白
 くく鹿の小走りすらをの白
 梯の木れをくくをの白
 ありやういふわてをの白
 藪の木へ曲りくくをの白
 牙正つくくおたりをの白
 糸子のくくくをの白
 翠しめて木をくくをの白
 道亮
 寛松
 芳笠
 今
 様堂
 羨う
 二府人
 卓池
 少女
 共堂
 且く

あくくをくくてをの白
 すとまりや男の目もをの白
 隣りくくをの白
 いんをその花ををの白
 其ふくくをの白
 程抱にゆきとをの白
 牙にそいぬをの白
 糸の白くくをの白
 糸の白くくをの白
 光を木にけくをの白
 山里やくくをの白
 鶴元
 山中
 詠
 丸素
 如深
 三
 指
 井古
 能
 双
 菊
 系

題兼冬

老よりもさかたにさしをの月
 柴の戸よりあり 凍るまの夜の日
 足ぬすりれそ本にたり夜の日
 籠ぶかのそなれさたり夜の日
 冬の日ほもささう山の上
 冬の日冬もささう山の上
 世より此麓のぬりや夜の日
 あら海にさそそやされて夜の日
 松よりささうや入江夜の日
 月ささうささう雪井の光か
 冬日此歌にささう作りぬ

茅丸
 常陸
 橋麿
 甲斐
 鶴魚
 戸
 尾松
 京
 葛砂
 備中
 晋和
 西樂
 覽表
 公

冬力

氷破りて池に日ささうさ
 冬日や松木中の中三竿
 冬日や白旗のぬふ物代あり
 冬日や吹ちかたさるりの歌
 冬日やささうと揺る鶴卵壳
 冬日にささうとささう大カバ
 冬日や水ささうとぬく世継
 冬日やささうとささう角と角
 冬日やささうとささうささう
 冬日や柳ささうとささう
 冬日や日代ささうと男あり

公
 葛打
 白旗
 鶴魚
 大川
 土師
 向島
 木僊
 葦沼
 成貞
 西樂

楷

そし日や星に程の後つみ
大さや八月序しお松の月
そし日や高のそある沖は凡
そし日や壺前たさる筆の言
新又天日此をさるをれり
そし日や凡もさるぬ林の歌
そし日や集の幾人の身に
おとそ日さるにゆる戸口
そし日や後にもる藤藤成
人かそ日此をさるをれり
徒免つしそる楷ゆり

如泥
一葉
字洋
車兩
新眉
傳
掉歌
女
貞衣
花印
左符
曉義

〇九十六

題叢冬
舟

そし日や星に程の後つみ
大さや八月序しお松の月
そし日や高のそある沖は凡
そし日や壺前たさる筆の言
新又天日此をさるをれり
そし日や凡もさるぬ林の歌
そし日や集の幾人の身に
おとそ日さるにゆる戸口
そし日や後にもる藤藤成
人かそ日此をさるをれり
徒免つしそる楷ゆり

白権
保吉
存亞
乙因
姫丸
猿左
三平
標堂
公
業兆
一葉

櫛の火や立るる火たる心いさ
櫛の火や目もなほ代の息と氣
櫛の火やめは来や牛の息
櫛に存てはれはひよふ歌か
櫛葉とや外に如葉もなまを
牛のハハあゝその櫛のりし
松凡の物子をさげ櫛あり
くふふり又ひりかほるひり
すゝまやわらゝるれ考るる
炭よりや一交の櫛入て見る
炭ももてまゝふりし月か

伊勢

榎葉 一葉
菅笠 寬松
来年 秋枝
獻與 宗古
白旗 一葉
道彦

炭

炭より此炭の小隅もふいせ
炭よりや強りし何と子り
松凡の物入すれは炭を燒
すゝまや炭りて炭を碎とる
穢人よ炭りてあはれなり
炭のまやとれもや子の花を葉
炭のその人の心の片をうら
つゝして響く炭の匂は
炭常をたれは清り櫛か
打をたてしれは炭をたれ
くもや炭と片たる新の子

一葉 武陵
半古 几董
炭古 松葉
保吉 跨石
表崎 外央
士郎

系前此松の冠よりいづり庵
在りやまゝ一すゑ庵の冠
口明く此一う米也庵儀
その昔の冠の冠より庵火中
庵よりとよまふ不致し更にかり
前やまゝ庵の冠なり 兼同集
明の冠を冠ひるや本庵儀
庵よりおの立派よりその冠なり
然るや庵の冠なりも庵より
心あふまゝなりたらしや庵より
何れを庵の冠に板の冠なり

瓜 柱入 道隣 標堂 米貞 今 兼光 完素 喜半 左境 一星

庵の冠一乃てさゝぬやまゝ
庵の冠に花の冠なり 兼わ
りしと庵の冠本にのみありし
枝葉や深心昔の庵の角
庵の冠や葎のへりや庵の冠
庵の冠とゆふや知し昔の中
庵の冠よりなるや水
魚の骨よりなるはちるが庵の
十月の冠の冠なり 兼一結
庵の冠を洗ふ庵の冠なり
月ひつゝ見て 兼の冠の冠

岳嶽 志郷 兼光 直麦 一葉 庵人 卓池 百塊 井眉 梅弓 星標

題叢冬

入月此白久口と此端中右ハ
 素燈團に燃る正作アヤリ
 炭の長や短の糸の結玉足
 分る此松凡に入者火ハ
 炭素に鏡足とる母ハ
 十と素のこくハ素とヤ方此
 炭素の流久しと九十と
 毫くとよとひと入寸戸口ハ
 炭素を（味ろふ金）炭りたり
 ぬつと）序ととる能のいろハ
 好ふよりて炭沢山の火海ハ
 炭
 素
 十と素のこくハ素とヤ方此
 炭素の流久しと九十と
 毫くとよとひと入寸戸口ハ
 炭素を（味ろふ金）炭りたり
 ぬつと）序ととる能のいろハ
 好ふよりて炭沢山の火海ハ

瓶
 車
 凡
 野
 華
 二
 乙
 標
 宛
 改
 大
 瓶
 車
 凡
 野
 華
 二
 乙
 標
 宛
 改
 大

火 桶

たりしる此物此の火桶ハ
 且れぬ人よとありと正古火桶
 羅に並てんにを正古火桶ハ
 と存れある友女の中ハ火桶ハ
 人よぬ火桶出ると此物ハ
 火桶抱てて是れ入ありハ
 ねらふや火桶に張一葉ハ
 白灰や火桶に埋む菊の花
 火桶抱てて是れハ下とや此物
 抱てては正古や松凡相火桶
 梨と盡の人むよりとや此物ハ
 其
 素
 今
 葉
 白
 几
 二
 感
 然
 柱
 表

其
 素
 今
 葉
 白
 几
 二
 感
 然
 柱
 表

題叢冬

昔よりさきと存せられ相中桶
火桶もついでとまらや登の完
よもしくと堀のりけり火桶は
画房にりしと火桶の去りし
布の流る付方そ火桶
角力より充て火桶を担ぎ
相火桶五枚のありたり
松凡と扱出たる火桶は
相火桶系扱出たる
人素より火桶をりたり
おそるや扱出火桶を素り

権堂
為三
一
道彦
尺丈
白紀
奇園
魯隠
養
彦人
権堂

巨 罐

出さやあらわらるる相中桶
角力より火桶の素ありたる火桶は
一かふれる時代の白子火桶は
縁の斤の素あり下りつわ
人充てたるにありて
心なれ扱出たる
扱出たるのありたる
牙のりき定家ありたり
と平白の目見えたり
沈に牙を扱出たる
釣あらしのありたり

虎介
可盈
菊所
若村
白権
大江丸
士郎
寛松
後島
虎介
秋丸

題叢冬

煙火

是伸く你心は此ころつわ
 美なる中蘭とてつわは序とつわ
 煙火やつらふを著る湯のその
 煙火はついでに堀あふさしう風
 子しむむや煙火周くはう著る
 煙火やおしと序しとる風と序り
 うつと火やいらむ著る鼻花
 煙火や老の心の細りけり
 煙火はついでに序とつわ
 煙火はついでに序とつわ
 煙火やついでに序とつわ

半古
 左弁
 芒村
 几童
 白権
 公
 喜薙
 恒丸
 袁丁
 一葉
 日流

巨漣櫓
 暁舟
 湯島

題叢冬

煙火はついでに序とつわ
 海士う赤の煙火はついでに序とつわ
 煙火や拵についでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ
 煙火や序とついでに序とつわ

當公
 蕉百
 卓史
 彦人
 秋充
 舟
 班事
 一権
 彦人
 歌吾
 橋良

念

ひつりつりおぼたけのうらみ
古た人匠人のうらみに
松凡やたんぼのうらみに
あやうしやんぼのうらみに
さうたても輪回のうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに

白境
喜路
乙二
道彦
寛
寛
周
五村
八
八
八
八

題叢冬

さうたても輪回のうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに
あやうしのうらみに

喜路
士
八
八
八
八
八
八
八
八

杉見入心や日頃此古ふす
一り此事や義通くるよ
大り兼ても能くそとよ義中
ぬるわりの株をたゆむ紙糸
折ふ折す通集して信る糸
花より此義又廣げしり紙糸
おりし乃ふ心やふる紙糸
おぬにまけていふふす
紙糸ありし通る月々
浮草の葉のたしはく
糸入目糸玉やとけん紙糸

夢さる
寛松
一葉
雪権
二府人
長高
武陵
郁実
李尺
菊留
女
吳衣

紙
衣

糸柳し此花の裂る言
健の紙う厚き紙ふす
紙子や花に凡るふす
糸糸の通くる糸糸
老玉心へ折し世ある糸糸
飯粒て糸子此糸通る
裁層の折りぬてり
二糸やとそ糸割し古
きと糸ふ子にぬる紙糸
紙と糸糸の糸糸
糸糸も糸糸と糸糸

十
常

慈柳
知水
米花
覽糸
糸糸
今
葉左
白権
几葉
代糸
松見

題
兼
冬

ふれ見ちぬ声の聴ゆと破りこ
筆の白くもはきやふりたり
二人扶おけけりたりこわ
おれおれ富る武藝を盡きて
これいそおれ二重の虫さりり
古心にふりつてあるうこわ
海へおれおれおれおれ
芦鴨の足ありうこわ
こりこりおれおれおれおれ
兼書の中素やうと書りこわ
おれおれおれおれおれおれ

完素
成美
冥々
道亮
少伊
後物
日人
尾張
如
淡原
兼書
兼山

蒲 園

おれおれおれおれおれおれ
産まの牡丹めておれおれ
古心にひおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
これいそおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ

西素
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山

絳 子
彌 子

題兼冬

おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれ

兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山
兼書
兼山

頭

巾 ちうふたはあさしをすは巾中
いろくはふんのかや丸中
ふんふつひつひんふんふん
町ふれいふは巾中ふんを
柳ふつふつふんふんふん
朝ふの空ふふふふふん
巾中若くは丸中ふん
孝純子のふんふん巾中
小のふふふふふん巾中
花のふふふにふん巾中

也 宵
柳 丸
ふ 村
今
雙 雲
妻 丸
存 亞
梅 人
ノ 旦
二 層 人
米 丸

是 感

をふにふふてふんふん
美路の端皮ふんふん
華ふんふんふんふん
輪ふんふんふんふん
地の底にふんふん
ふんふんふんふん
ふんふんふんふん
ふんふんふんふん
ふんふんふんふん
ふんふんふんふん

守 橋
二 層 村
美 丸
月 祇
士 仍
無 為
南 陽
大 足
梅 美
孫 石
存 亞

題叢冬

その心をなすてまよふ心
その心も集むればなる風
静まの日は見たりやまの心
その心もなすればなる心
その心もなすればなる心
小室の心もなすればなる心
延たれぬまの心もなすればなる心
その心もなすればなる心
人の子もなすればなる心

月記
寒松
思館
女
九卦
巽
日芳
七侍泉
魯松
業也

其系
其海
其川

その心をなすてまよふ心
その心も集むればなる風
静まの日は見たりやまの心
その心もなすればなる心
その心もなすればなる心
小室の心もなすればなる心
延たれぬまの心もなすればなる心
その心もなすればなる心
人の子もなすればなる心

秀凡
木松
桂丸
月化
萬六
既吉
几董
宝厚
存亞
踏石
橋也

冬 田

あふれはるはさるるをのほ
虫のきりけと流りりその何
を田るる夕暮人のみりり
ちけしるが人に足るや田
た暮の横折るるを田
路の腰長しと鳴るを田
るるは来てはむにすを田
その言や心のを田の言を
板もは流るやを田の言を
ふるのけりるるを田
立るの夜より白くを田

半古
美若
悦
保吉
一
道長
府人
美若
後物
杜若
左民

札 納 配

張るて磨に交る札を
こしあり裁は去るあり
いりありか身はけり
いりありか身はけり
すもふや目えて風の小
葉の片の葉ちつふ
す掃や塵にゆく
すもふや目えて風の小
すもふや目えて風の小
すもふや目えて風の小
すもふや目えて風の小
すもふや目えて風の小

巴靜

美若
府人
美若
後物
杜若
左民
貞松
島屋
飛城
士
公
榮兆

採 掃

題 兼 冬

すけふや井子伐りもすけ
すけふやあすけし松北色
掛子もろろけけりすけ
掃きあてすけ石の若老か
すけふやま譲る子けや
軟弱に流るりけりすけ
すけふや片舟をすけ
すけふや袋破すけ
笑ふあふけいけりすけ
すけすけけもむけけ
すけすけや心けのあけの

沙羅 威員 公 柳也 見直 三願 喜牛 大鼻 月化 電権 産人

餅搦

題叢冬

すけすけけけけけけけけ
白敷るも第もあけすの青
余込の熟の来てけ合けりす松
すけすけけけけけけけけ
すけすけけけけけけけけ
百何と松もけけけけけけ
すけけけけけけけけけ
すけけけけけけけけけ
すけけけけけけけけけ
すけけけけけけけけけ

危印 一峰 雲帯 松江 久藏 李天 女漢薬 雷師 花枝 武秀 碓氷 多磁

喜うりし時よりほくし餅送
 貞孝のも来はるる餅のさよふ
 りらまつゝきん小かきうり
 梅の木もかき梅つゝ小かか
 糸つれ来さうかゝり梅送
 梅花の本法にてうらあひか
 餅ふやむる多ののゝ名え
 年 頁 ぬ折 悪てゝ追ふ年の頁す
 年 木 蕉 小らひや小枝も挽ぬ年す
 年 木 蕉 たるすも梅はゆせ年す
 年 木 心 帯ハ釣の小ふか

夏 右
 道 亮
 白 虎
 子 龍
 一 葉
 今
 白 玉
 白 凰
 花 舟
 恒 丸
 秀 成

書 哉
 出 乞
 分 分
 年すり梅と氣をなかり
 出や積かきしと出れし
 けと氣の白ふ肌や梅の梅
 是乞に足ち去るんつれ心
 糸帯や挽もさ流兒も来ん
 年すり梅と氣をなかり
 分 分の波すけし小き
 迹てこそさうりもる梅年の見
 そのまに梅うきさ見ハ外
 是すりし流や流婦は立すり
 是はあうりもる梅の豆

持 磨
 来 之
 保 吉
 序 人
 園 子
 几 董
 常 笠
 尊 深
 二 層 人
 秋 左
 三 及

題叢冬

年 越

子越や若も管巻の打あれと
とこやはあよりとるん小

江戸 軽舟
飛原 拖魚

多翁の言り子守一板水

奇劇

あつてまや下れありしわ

萬葉

瓦 扱

瓦を以て流し置るる瓦扱
端場の出り此出り瓦扱

素丸

やそそい案下にはまや打り案

言古

本光に兄つけりわたり瓦扱

月磨

扱 揮

扱をさすや築地の扱れすて
夷原はありともんぬ扱中

乙二
素丸

扱として藤下にはもれ味り

弱 揮

自糸の束や扱に帯いし
扱久し扱れし之は 季子

柳屋
葛左
成英

あふひと名のをめね人トあり

今

はつせやあふひとて子風り吹

洋采

いへる人目にくれ花季子

首三

帯にやそいれおけり

一子

あふひやあふひとてあ子に連て

蕨丸

あふひとあれり食をさす

道亮

あふひやあふひとて小あふひ

一葉

あふひに赤鴨あふひ

布席

題叢冬

世ふら井を叱て返りたり
 鷗飛に敵もさすや花季い
 せふんや竹も打り守心さす
 妻めぬ詞をいやその肉
 喜つてやいさるおは木葉
 鴨さうやそや喜さう物産
 天に鳥うし常さうの喜
 舟の尾を引く山花露さ
 舟の市常妻はちう月さり

妻耕
 米花
 女
 子代
 喜
 士
 成
 不
 保
 吉

舟の市樹さしとそ返りたり
 丁物さすめを怒しや舟の市
 舟の市産に常よの古鏡
 舟の市そそ國そさし舟の市
 舟の市そそ大勝さう勝りたり
 小刺妻吉次もさす舟の市
 足正定にそ板妻のすり
 心星の師走さうそ穂長妻
 舟の市そそ大光や松の市
 人に妻さうさうそ松の市
 舟の市そそ大光や松の市

舟の市
 松井
 完
 道
 日
 暮
 人
 可
 凡
 其
 文

題叢冬

門松立 月夜の松葉に立て囃ひたり
 古 磨 人悦はりゆ松の古ことよき
 眠らり此松を居りわきことよ
 磨 奏 磨奏是元はりの奏もたり
 乞食をんと物かき磨の磨
 鯛味啖 鯛を中折ふ多にたき
 忘 夜中を心忘井の謹うか
 いろしや鯨みすに夜中を丸
 忘 意事にはやて物めたり
 うか忘に物 焼や 忘
 ようせると大なる夜中を丸

圓井 几董 一草 寛松 不物 彦人 若左 樽元 素丸 喜茂 大江丸

愚子これの忘れはもろなり
 きのこらぬ男めたり 忘
 えりこりと尋ふ人や 忘
 松の本に立れて見や 忘
 奏葉をわたりて 忘
 焼の松風をりたりと 忘
 忘花の葉は 忘
 折ふに忘れ 忘
 忘 忘 忘
 小守り心の出入や 忘
 焼録のつ毛あるは 忘

徳昌 柳庄 志葉 彦人 雄剛 直奏 梅向 二蝶 喜村 方角 道亮

題叢冬

年 門 どのつを美白に極まり

年 磨 松の松も第にありの磨

去 止 ともあふふふふふふふふふ

老松や去止ふふふふふふふ

羽第の去のふふふふふふふ

去 約 嵐子や去約のふふふふふ

くうたふの極も去いふふふ

去あふといふふふふふふふ

去あふや極の熱赤の松の口

去あふ子とふふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

上方

道亮

成貞

石坂 要友

信法 武田

白権

炬光

彦人

護物

秋友

長光

葛丸

呼牛

可翁

西梁

悦斎

長高

橋見

葛右

悦斎

保若

斗入

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

あふ去のあふふふふふふ

題兼冬

月三

新 年

竹馬にあつてはくらくの
 けしあつたりりり清の鳴
 海碧て整りてや嫁枝鹿
 けりてりあり自あり天は丁
 掃るる帯や子のめ
 けりてや孝子にふふ米ぬ儀
 けりて大か上るつゝ流りれ
 けりてのこもつともあふあわ
 けりてや帯をこに陽に梅枝
 けりてよまふも美の浮橋か
 けりてのけあつりり梅の流

下
 女
 助
 董
 鹿
 古
 岱
 喜
 存
 亞
 孫
 石
 斗
 入
 士
 初
 人
 星
 布
 橋
 堂

題 叢 冬

けりてあつたりり入りわ
 けりてや感人町の報の喜
 けりてや親まある男の報
 けりてのいえもあやの白装か
 けりてよおんか鹿のりもへか
 けりてよ子たつてつゝ松の丸
 田楽の素あつるちるも
 着てけりてや子ちの是のあ
 けりてや帯の先の鳥りり
 けりてや小ちのちの鶴の嘴
 けりてよ梅の下るる小ちか

成
 貞
 年
 人
 尚
 平
 素
 菜
 子
 孫
 不
 國
 泳
 海
 路
 完
 秋
 免
 其
 辭

川の洞子つる敷の杖

陰矣

貞中

川の流すしほある流の音

尾張

柳磨

川のうらり流の響か

尾張

免郷

川の岸にささるや都る

陰矣

梅子

川の石にたへたる水

飛鳥

存亞

大崎の

素の葉の巻の版

存亞

素の葉の巻の版

存亞

素の葉の巻の版

存亞

除夜

大とくは世の候もさやうり

年柱

除夜の鐘の音もさやうり

保吉

乙二

乙二

鶏の鳴るやあはれあはれ

道亮

鶏の鳴るやあはれあはれ

右盛

鶏の鳴るやあはれあはれ

右盛

除夜

鶏の鳴るやあはれあはれ

馬年

花お

題叢冬

為勢未におりすそあはれ
人慕ふをのや猫の鳴き声
暮しよのそとあはれそに降
山陰や控さやふるをの家
を深ふ候の中のをま
燦としてのけおそをふの家
者ホにうしろ見られてをの朝
朝葉のむこうをみよりを者
針に夢うそ長えけしをの宿
を正すもなふ山辺のこよふ紫さる
を文の田畑の売のこよふ

紫 巖
不 明
士 仍
骨 堂
長 翠
標 堂
成 炎
乙 二
今
道 危
今

空菊の多てそあれ勢
多羽のむらふにをの暮小
ややくやわしそそを骨
井の戸やいつそもを楓
白くそ風をや朝うそ藪の暮
びをい男むらて焚火大
霞のあはれをの片つくこ
やうたぬ良てをのそ麻
者うそやあ仙山葉花枇杷の電
耳れては引板鳴里やをを紫
湯蓋にをの沸と字てをり

菊 如
三 庭 人
護 危
葵 堂
梅 向
小 庭 人
宇 橋
牡 巖
惟 平
葵 堂
東 葉

題兼冬

世に因樂放不たはいふも此ありて何るひも
 或はけけうち録を何やともは口下火をのこ
 入る見えを楽をそりす蟻と形しおと
 出末くのわき人のめかともは海軍あを
 志記まてのるに或る寸是を志つうに指ふに
 外ろをう包あつては何んたか此事には
 かなしくてはひよれが信満をほる事

題叢跋

月書ノ人

筆のつらさを承けてよる川の星の光もかき
あふ寺の都のいの句法もむもひや里の松
乃心法法もそ後法法もそ高妙の山も
不も入たのちりし和音に師たし高麗の
元て海やましし何進の角在人の求たる
あふ残るもめてあうちかふ残るもあふ
なる残るもいま詞の林もけ入る山に
折れりや世にひるあふいふ人あうか
らるる

浦人た節とらふ松原よそを残るの以諸門
人そ外名たはふての句の諸集り散
見すまそ是をのそ記てを世寶曆以下
此こそその仕者もて廣くあつた物
ひては其數一万余句り
其れ他例残るもいふは書にありは
事何るも一わきもあふといふ夫木
名はけぬへ兒あといふ是を法
子見常に

題叢城

是書に

補して化意如功法...
 河とをたうぬ...
 輪おのく...
 論す...

随斎...
 水

附録
人名居

班位不序

山城	如泥郷	燕村	關更	耳考	瓜流	久風	野明
蝶夢	大祇	紅羽	秋鳥	共諺	都雀	一山	一瘤
子鳳	為文	芥水	丹芽	車蓋	芦角	几董	一桂
安里	宜甫	來之	吾仲	諸九	可樂	方山	翠之
紫曉	貫古	荷屋	金毛	鳥和	丸春	春坡	南岳
馬印	麥宇	倭泉	嵐月	土髮	定雅	瓜全	蒼虬
雪雄	梅價	百池	芦涯	土卵	空阿	五芳	松蒼
其成	居然	毛舉	月峯	南曉	芦丸	蘭二	應美
嘯山	江蓼	金萊	鴛少	若夢	丸々	馬龍	月更

題叢人名

管鳥	葛年	桃江	丈石	芙九	栗翁	可南	乙道
十丈	采也	岱李	布雪	草阜	千崖	茂良	杜蓼
守三	暮四	有中	柳江	沙村	霞湖	東裡	路一
漢水	十壺	橘榮	鸞太	貨僕	里毅	萬栖	文雪
子靜	乘居	乙彥	丈我	白蟬	梅居	文芹	共樂
芹坡	烏雪	蓼砂	好古	桂肩	百丸		
大和	龜水	千代	濮水	緩駕	左禽	杜口	和山
嗽石	憑月	布荻	巴摘	彌山	林系	卯明	福丸
可亮	可翠	暮來	其杉	拾葉	絨勢	墨溪	哥烏
香宿	嘉樂						
河內	其鵬	乘紀	月篔	蓬宇	徐菊	冰水	楚山

一翁	嵐來	古光	其桃	南光	沙王	八之	可省
雪丸	竹圃						
和泉	喜齋	嘗笛	魯月				
攝津	淡	車庸	因之	櫻叟	二柳	大魯	自樂
李友	大江丸	東雲	五趙	春臺	友國	升六	水僊
百堂	氷儿	方水	一草	月居	尺艾	瓜坊	奇淵
長齋	魯隱	三津人	萬和	井眉	桐插	蜂友	芳中
鷺雪	麥太	岩苔	梅後	吳老	米彥	屋烏	星譜
竺齋	夜來	釣翁	瑞馬	左逸	三坊	扇暑	松隣
汝川	草億	祇杖	杉良	素虫	春人	春哉	春思
白涯	二蝶	吾雀	可隆	吾萍	春魯	未徹	左角

題叢人名

伊勢	伊賀	一醉	筈町	天來	壽樂	五道	花外	水老	月巢	天馬
橋良	朝竹	朝竹	遲柳	玉叟	松子	嵐谷	秀丸	史川	外海	三霞
素道	車來	車來	榮	紫鳥	遲春	松月	皂石	士川	晚翠	竹亭
披仄	士得	士得	了	祇白	染雅	蕉里	少齋	吳服	屋馬	鬼將
杜菱	雲江	雲江	天	九玉	公路	儿仙	一鶴	籬峰	東明	東室
披長	猪來	猪來		茶來	省三	嵐亭	二鶴	里人	龜村	已明
宗居	梧鳥	梧鳥		五株	白齋	冬色	今貫	唐來	芳鶴	風雪
宗兩	閑竹	閑竹		春渚	桃柯	淺生	一馬	桃葉	梅鳥	菊房

野梅	關鵝	為貞	聞樵	子得	椿堂	稚已	梅二	夙也	尺翠	志摩
五角	六龜	馬曹	龍石	丘高	雪仙	李東	杉蓋	巨洲	六外	如山
左涯	羅外	來汝	他力	官父	合乙	翠川	省我	省吾	一木	醉瓢
青川	汶水	景山	鷺溝	渭川	五蓬	如雪	長芽	宗古		
滄波	虎園	杜影	花眠	不求	寸明	鶴臺	志完	曲路		
弘臣	右存	桃波	左竹	見風	孔阜	菊所	半古	昌作		
石燕	春波	曲郎	左濱	香有	淇石	一路	無牛	野渡		
李石	浮石	蘿父	佳夕	無曲	烏翠	周終	丹霞	雲子		

題叢人名

尾張	兩柳	曉臺	也有	巴靜	白圖	岱青	一玲
其苦	羽墨	等龍	南水	烏秦	野秀	蝶羅	壽山
理玉	辨二	羅城	松元	士朗	臥央	騏六	天老
桂五	白尼	五雄	帶梅	岳輅	塊翁	快臺	秋磨
大阜	少汝	金谷	梅開	月底	沙鷗	不轉	鹿野
應汀	墨山	大商	十一	素外	餘祥	松菊	大巢
平齋	國水	由肆	賈天	菊村	李臺	東陽	足秀
大蘇	硯靜	黃山	昆明	谷臥	水天	永齋	盛雲
水容	五老	珉古	龍眉	月巢	茂東	驢亭	關樹
我竟	宜彦	楚山	逸人	有磯	得芝	青城	松呂
旭山	阿城	徐英	葛井	葛齋	魯堂	駕風	而石

陸馬	東蹊	白樹	墨樵	秋園	一風	米汁	眠屋
虹陽	杜堂	倭中	沙玉	李叟	可玄	牛來	梁臺
五道	湖風	竹趣	圃曉	栗天	野喬	可竹	路郭
和平	路大	友鳳	遊好	三糸	里山		
三河	青牛	浮流	祖風	麥二	水朶	方明	卓池
秋舉	岱呂	楸老	其桃	箕山	東鳴	木芽	白羽
喜春	恭筵	水芳	東雅	流芝	南老	巴洲	
遠江	瀾古	百洲	起石	水甫	雪杏	橋夢	吐鳳
駿河	蓼舟	左逸	文武	周竹	里仙	梵阿	馬老
萬古	菅雅	画牛	桃舟	鴈赤	石雅	良岱	
甲斐	鳥我	東里	可都里	漫々	嵐外	有斐	蟹守

題叢人名

大年	樵村	重行	漢甫	臺賦	鱗魚	鏡平	草丸
一作	草鳥	真恆	作良	山甫	方居	才馬	遠克
裏山	亞梁	百二	物成	都氣人			
伊豆	一瓢	連枝	官巖	助董	雪艷	米堂	省已
春成	真砂見						
相模	春鴻	麥水	巴水	澧水	叙來	葛三	玉珂
丈水	雉啄	方斛	也々	石年	洞々	鳥流	松蘿
乙鷺	文魚	松乙	之道	大曉	雪路		
武藏	千尋	層龍	花候	貞佐	不角	仙鶴	柳居
鳥醉	意程	一雲	門瑟	蓼太	百明	鳥明	紫居
山川	左明	白雄	存義	百里	紗言	得牛	笠扇

雷堂	米仲	玄武	寒玉	柏樓	平砂	吐月	丁壽
梅居	雪左	柳儿	樓川	呂曉	秦國	乙河	文岡
敲水	湖風	宗讚	秋瓜	牛飲	鬼秀	宗瑞	似鳩
素丸	風洗	斑象	野菊	瀨川	金峯	百川	保吉
政二	素菊	鷄口	卷阿	梅人	西羊	棗花	寸來
石嗽	故流	馬十	輕舟	竟平	水奴	雪江	慈心
富屋	菊明	芙蓉	春海	無說	以足	可僚	文足
鼠六	六窓	浙江	雪萬	素嶠	春蟻	人旦	柳也
巢兆	花縣	星布	白麻	萊波	京傳	成美	完來
莎笠	沙羅	螞潭	岸屋	牛心	田霍丸	白芹	普成
成蹊	東塘	雅磨	萬里	竹支	表丁	來帆	百華

題葉人名

道彦	鶯笠	寥松	蕉雨	護物	水海	對山	一峩
其堂	且々	碩布	立志	紀逸	宜麥	素外	兀雨
文晁	鵬齋	南湖	董堂	蜀火	素玩	一阿	三化
萊石	心非	壽翁	國村	北元	右雄	双湖	孤山
胡準	一蕙	可磨	詠歸	久臧	巢也	國甫	鷄川
黑駱	竹妓	巴江	九卦	葳輝	萬外	座來	系年
應々	女	曲阿	老阿	秋兔	鳩丈	升古	槐市
澤至	芳洲	指月	菊塢	以兮	濱藻	竹馬	車兩
守靜	陶里	玉光	任只	素桃	暗牛	山人	諫甫
山允	豪山	芝山	茶靜	宇橋	素樸	碩齋	鷺雪
啟山	梅夫	自來	山松	梅年	南井	文都良	游無

笠甫	菜山	鈍齋	丈河	鳥路	粗文	曉雨	錦城
野遊	子交	月樵	乘嫁	龜文	南山	南溟	五百丸
高駟	夫山	太氏	筵志	几秋	二川	嵐峯	海也
路川	巴人	三壽	一兩	明良	有教	語竹	秋耳
季道	子共	我風	一夢	秀都	吳葵	梅邨	淇岸
泰人	梅英	午桂	老鴉	信丸	萬船	兩籟	長閑
乎馬	可笑	金花	敬哉	木貨	松枝	江鶯	歸堂
可良久	燕子	東美	禾葉	東雀	緇逸	星高	草芝
吾孀丸	文園	梅岑	吉雨	一雄	英久	竹邨	米花
玉桂	雨穀	梅枝	芥糸	湖風	挹朗	奕衣	芦錐

題叢人名

七、
江川、
白玉、
會見、
豐岡、
路考、
芦錐

安房	也州	杉長	郁賀	卜鷺	其丈	亞然	鳥周
斗白	一盛	素共	平雄	兩鱗	宇明	竹由	東居
柞枝	天府	雨林	林鳥	一醒	輪之	白老	里丸
上總	呼牛	挑支	音八	兩十	萬	五柏	
下總	兔石	桃源	霸凌	鳥朝	玉芥	巴蓼	存亞
長翠	三顧	雪河	双樹	恒丸	素龍	肩尺	抵来
兄直	素迪	鶴老	秋左	柑翠	兩塘	一白	一長
素迪	其明	故校	至長	素月	研石	梅曉	蒼峨
月舩	茶彦	金堤	惟平	卒峰	隘水	鵝雛	東騏
桂丸							

之綱	榮松	石觀	倚風	鱗々	尚山	幽篁	梅史
普記	汶里	香風	如柳	鼠文	青岐	馬逸	月丘
月芳	成之	猊母	素綾	蓬呂	丘黛	紫山	吳雀
求一	文蘿	松巢	蛋路	蝸雀	玉彩	帝笛	錦哉
可門	女の	孔祭	汝南	斗圓	月曉	眉月	兔鄉
角米	菊明	若雨	素孝	怨柳	燕巴	兔園	牛乳
常陸	三坊	觀之					
不脱	知廣	浮来	祇德	車童	遲月	常南	五峯
有美	阿量	卜甲	湖中	左文	淇水	由之	李尺
眠石	文川	雪守	松江	柳磨	三有	杜年	風後
	鬼平	一止	義香	村江	祇三	瓢翠	雲槎

題叢人名

昭眉	知水	九似	知敵	祗鳴	雲翼	隨和	一風
近江	田札	青奇	扶石	冬柱	遲望	都覺	魯江
可風	重厚	邑洲	馬瓢	菊二	青楓	祐昌	騏道
芳之	蛭刑	申齋	千崑	于當	亞溪	烏頂	志宇
繡布	宇洋	可盈	文常	士明	春雄	斑車	龍山
栢翠	春坡	淇園	巨洲	燕巾	三省	笳音	石處
素律	花陶	松毳	龜梁	砂文	文山	東明	獻美
元美	茁堂	白民	水友	百枝	蒼人	梅園	仙李
汲波	還古	玉英	梅雄	古猿	素流	里童	
美濃	宗志	童平	五筑	楚流	以哉	雲裡	左流
七兩	三伍	箕十	右範	千阿	草人	麴平	丙子

萬朵	飛彈	步雪	遊魚	儲史	平芝	涼成	麥二	希言
信濃	友梅	鷄山	素因	自得	涼成	麥二	希言	
猿左	柳莊	若翁	如毛	扁枚	素藥	一茶	若人	
雲帶	何丸	壺伯	何賴	六粵	文兆	路人	五什	
乙堂	錦江	吐文	鸞岡	艸司	隱市	杜厚	春與	
芦菴	伯先	伯良	可考	田山	玉芝	木鷄	月兼	
香都良	可奕	汝蘭	春甫	正阿	柯香	介亭	丈馬	
路因	美敬	一之	恭雄	武日	一考	文路	春耕	
素鏡	左鼻	意吉	春明					
上野	朔宇	眠醉	兔山	三巴	如白	兩竹	斑雪	

題畫人名
月夜

素輪	秀和	風狂	麥泉	霞雄	壺半	浦人	鹿太
第磨	雙鳥	北尼	確令	鷄秀	百童	微風	井德
其雲	射毛	笋露	布什	是牛	杆白	澤雉	六花
許一	川二	霞龍					
下野	素磨	胡國	紫桂	真斐	魚文	北盛	道澄
尺樹	其丈	柳起	雄尾	竹丈			
陸奧	鬼子	鬼孫	祇川	明之	言左	一至	浣素
芳角	危言	繁束	青二	綠水	麥羅	至岳	麥洲
長白	北達	露秀	鐵仙	五角	蒼里	吏仙	南陽
三徑	八風	乙因	鷄路	白居	涼秀	露超	巢居
管菴	南山	乙二	真々	素鄉	平角	雄潤	日人

本授	亞笛	不圖	律大	真中	如蘭	祖庸	雲呂
吾石	兩考	與人	真也	布席	百非	大呂	如髮
紫明	柳明	与 ^女	吞溟	巾羅	画鶴	見車	秋夫
北溟	左龍	十竹	世竹	買月	東齋	文卿	萬象
馬年	芙蓉	寬兆	玉之	子孝	董平	守中	龔兄
獨醉	魯冠	都龍	竹路	瓜雄	奧童	熱石	深耕
烏秀	文翠	斗水	一鼠	蘿狀	等舟	凡鳥	魯臺
寸雅	董車	草也	兩舫	天民	青良	燕川	蘇山
蘭叟	夢南	東芽	三及	士由	谷雄	月哉	女 ^白 代
柳郊	草塘	几隱	俳佛	調雅	寸車	本枝	長寸
其爪	乙調	玉筒	調瑄	左来	卓堂	蓬寸	旦嘉

題叢人名

東嶽	巨山	桑布	了童	鸞子	文冲	馬令	心何
岡虎	空明	春魯	梅子	蘆	尺山	呂蝶	突
風虎	柯亭	蘭翠	北鳳	石丈	魚遊	無樂	無底
桐水	澤鷺	瓜碓	南平	菊路	調喜	二蘭	旭木
雄飛	五阴	三里	視月	素來	養艮	芥二	蓬山
壺春	無外	一水	文梁	松鳴	海樂	英二	白泉
和鳴	西瓦	子容	盧外	汲古	吞鳥	朴齋	蛙眼
勝丸	一二	維新	李光	吳峯	草坡	乙丸	志順
一柗	一蛾	彥貫	文何	玉息	柯國	橘兩	春岱
白扇	岐山	芳齋	東丸	似山	星德	沾橋	梅其
太乙	茂	春翠	汶由	亭	旭	可遊	當麻

柳	千賀	龜丸	東峩	好和	壺中	五明	素風
出羽	真松	洪水	鸞窓	好和	壺中	五明	素風
小野人	五瓢	野松	仙風	渭虹	五貢	杜齋	淋山
祖六	儿峯	阿歲	可來	渭翠	峯梅	佐以	有鱗
桃史	丈永	河道	蘭丈	吳石	稻丸	文明	木子
佳水	之玄	和友	巴陵	尋風	楓二	仙友	永我
如	古翠						
播磨	山李	梅盧	尚平	青蘿	蝸國	五嶺	布舟
以友	雲關	玉屑	起蝶	脫負	巴山	野泉	左龍
茶來	和三	一曉	周泉	桃岐	其圭	春省	田實
龜仙	文鄉						

稻焉	南皮	宇柏	安藝	六五	鶴鳴	備後	備中	備前	美作
枝曉	荷香	梅佛	風律	一色	南路	愚軒	素秋	風角	梅府
雨丹	文衣	五鹿	敏彦	梨蝶	桃甫	奇菟	曲江	松後	櫻左
路宅	圭兩	李石	雙虬	光壽	方壺	嘯月	斗外	百花	朝竹
枕流	十六	素白	篤菴	桃園	蕭雨	虎道	文里		紫水
金蒲	三花	西岐	玄蛙	芝邦	東翠	里因	栝關		得山
嘯二	綾彦	宇月	凡十	柳	遠三	藏六	卷一		月磨
水容	其滴	建史	可友		柳絮	喜林	掉歌		龜年

〇十

普鮮	露井	阿波	淡路	紀伊	長門	百樹	周防	呂調
墨友	吳雪	白理	青收	萍左	林風	春鄉	合洲	茶隱
石羅	羊虫	青橋	水虫	水賓	憐霞	一葉	湖流	露月
菅六	土芳	葦泊	本長		羅風		羽琴	其夕
九花	莖峯	藍堂	花桂		素道		為充	千可
	千化	鳴雄	荊玉		花寮		蘭臺	丈巴
	寄桂	弓雄	桂山		目丸		古梁	其雪
	梅子	六珈	枕堂		里山		天民	兩竹

題叢人名

越前	若狹	讚岐	上佐	花明	石鼎	伊豫
五鼎	霜操	雲江	瀨江	至江	薺山	隨友
連漪	嵐流	杜洲	其梅	白雅	米年	驅牧
巴丈	蟻行	茂推	瓜六	梢雨	其松	千鬣
挑因	鷺白	周雨	有極	子鳳	其遊	芦舟
哥川	貫色	系月	吾好	五槁	吳天	五粒
重葉	玉壺	宗德	紀及	磊々	春城	楞堂
虛白	省我	桃里	湖芳	送秋	祈流	靜山
白鱗	東鳥					

〇十一

越中	越後	祖明	由都留	蓬山	秋帆	能登	佐渡	加賀
荻人	牧童	路大	路十	山之	二川	見推	文雄	希因
麻父	七里	岐東	年眉	松魚	寒崖	司驢	晚籟	千代
听之	青阿	桃路	鷺洲	右之	大睡	甚化	正哥	桐之
梅此	喜年	丈高	竹童	竹里	敬山	此江	後川	
季布	左琴	吳洋	子臧	其靜	一方	東裁		
一庸	幽晴	史千	國丸					
不丈	石海							

題叢人名

因幡	可笑	但馬	挑之	魏道	丹後	丹波	馬佛	甘谷	花仙
秋菴	水卯	髭風	文白	萬籟	端雄	滄洲	梅人	車大	麥水
雷師	菊葦	野牛	春湖	垂耳	南畝	武陵	鳥平	鹿古	豐水
村之	黃貫	寒香	冬鶴	昌平	馬吹	野揚	五葉	其友	十人
無闕	月波	松居	潮花	蘿水	東陌	春涯	音人	稻守	佛山
千溪	有城	尚古	弥芳	燕良	竹圃	白路	とと	半場	斗八
南溟	鳳兮	鸞崖		魚眼	尺布	挑子		江涯	松井
		南飛		栢之	似藻	六合		松花	眉山

筑後	吾成	松雄	里帆	金花	北溟	危詞	筑前	石見	出雲	伯耆
双鳥	白志	求古	麥吾	石睡	柳左	蝶醉	向水	梨明	沾嶺	魯竹
其成		二蝶	撫節	再可	丁々	一萍	雨銘	古徑	風水	亞來
文角		赤秋	哥舌	可十	已蘭	瓢風	江棧	露月	花林	眠月
東鶴		其柳	可升	杏池	淨玉	吳來	一招	吾風	槁丸	豐明
與洲		泉左	魯白	如來	臥山	古溟	石蘭	梨雪	富峯	歸來
鉄舟		紅鬚	寒鴻	計子	玉莪	五朗	甫尺	英月		沾雪
葵足		万牟	李仙	雲平	湖柱	瑞芝	莫二			湖水

題叢人名

淇水	良砥	慶五	輅兆	揆姿	龍白	方舟	芦月
米汝	温古						
豐前	夏推	本堯	應律	此芳	渭水	了國	温水
桂川	箕筮	靜齋	秋水	南明	文鸞	大室	一峯
石亭	兔園						
豐後	不羣	子駿	頭水	斗周	蘭里	有篁	月化
葵亭	杜由	蝸若	此柱	南溟	一幹	臨霞	春坡
管之	楚濤	淇流	花六	真澄	年々	竹枝	龜方
月英	五城	枕序	雙草	魚舌	斗林		
肥前	枕山	盧風	李溪	蘭圃	加十	春亭	文鯉
甲乙	幽雅	清淇	天外	祥禾	鞍風	菊也	其映

天馬	吾友	一路	文兒	大莪	玉阜	定太	金波
文淵	恕交	忍口	春高	虎睡 <small>婆</small>	南太	可笑	米蟲
可交	何以	琴松	梅調	五英	三津 <small>名</small>	周作	
肥後	綺石	潭月	砂童	眠石	文曉	一壺	仙弁
霍渚	有汝	岫丸	蒼鷹	蟻城	三考	菊思	
日向	塘雨	真彥	竹堂				
大隅	雲道						
薩摩	谿々	三桃	斐文	龍門司	琴州	青梁	只冬
巴水							
壹岐	三雄						
對馬	花晚	戲蝶	杜洲	仙瓢	曙堂	玉芝	我笑

琴松

小豆島 島芽 無物

八丈島 風宜 孤雲

國名不分明 追可考

梨鑑 萬草 吏荆 青大 茂秋 鹿徒 花竹

奇文 和道 鋪雪 秋坡 雨葉 松笙 蒼鷺 周竹

統計二千七十二人



俳諧叢句題叢

梅丘左師先生輯

全四冊出来

此書は海内の名家権良喜村曉臺蘭更夢方白雄より萬句
抄りて撰名家集り若くは成あり免り考り於歌部を分ちて六冊に
分りて之を以てしは此より成りて世に多き習ひの多し

俳諧叢句題叢後編

日輯

全六冊迄刻

後編は名重部二巻 祝送別 羈旅 旅泊 述懐 陰翳
神祇 秋意 物の名 毎巻一巻の回数 雜部二巻
序ありあり并文章の部二巻 題叢云々二冊迄迄刻也

俳諧故人五百題

松尾芭蕉先生輯

小本

全二冊出来

此書は故人の心成るるを以て芭蕉先生の名を以て撰
題の多しを以てしは故人の多しを以てしは此より成りて世に多き習ひの多し

俳諧續故人五百題 隨筆成美著 全二冊出来

此書は世に珍しき俳諧の名人の遺著を多く採りて、其の多きを
又命をなすべきを採りて、便利とす。本七

俳諧今五百題 夢南先生輯 全一冊近刻

世の名人より當時より、今も昔も、名作の多きを採りて、
其の多きを採りて、便利とす。本七

芭蕉翁奥の志より 湖日柳條輯 全二冊出来

芭蕉翁の奥の志、其の多きを採りて、其の多きを採りて、
其の多きを採りて、便利とす。本七

ぞせ成文草圖 全一冊 俳諧たのめくべ 全一冊

凡俗の選りたるもの、其の多きを採りて、
其の多きを採りて、便利とす。本七

日本紀記々歌集 賀茂真淵内人林居士 全二冊

此書は、賀茂真淵内人、古代、其の多きを採りて、其の多きを採りて、
其の多きを採りて、便利とす。本七

正徳の俳諧 賀茂真淵輯 全一冊

正徳の俳諧、其の多きを採りて、其の多きを採りて、
其の多きを採りて、便利とす。本七

増補狂歌林抄 狂歌堂真親大人 全四冊

後、狂歌の行、其の多きを採りて、其の多きを採りて、
其の多きを採りて、便利とす。本七

狂歌おもしろい

狂歌集 狂歌集 狂歌集

全二冊

狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集 狂歌集

狂文四寸はる箱

狂山人 著

全二冊

狂文四寸はる箱 狂文四寸はる箱 狂文四寸はる箱 狂文四寸はる箱 狂文四寸はる箱

狂文寶合乃記

狂山人 著

全三冊

狂文寶合乃記 狂文寶合乃記 狂文寶合乃記 狂文寶合乃記 狂文寶合乃記

俳諧蚤のあそび

狂山人 著

全二冊

狂山人 著

類題俳諧歌集

四季 恋 雜 長歌 物名 連歌 落書

四方歌垣大人輯

前編 三冊 後編 三冊

類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集 類題俳諧歌集

立春

狂山人 著

狂山人 著

忠房

元聞賞

狂山人 著

狂山人 著

西行

元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞 元聞賞

俳諧發句題辭

椿丘太郎先生輯

名可 地名 全四冊

一名俳諧千五百題

はるか昔の春村に暮るる友の園交はよりこころあやうく
海内の人々への懐かしき筆を以て筆に情をわづらひ
地名をとりてつむる名をこころに志しけりし
こころの筆もそと一紙を以て見まへし
たよりいふもさしづかし
世に御社の名ありといふもいふはまことなかるまわりの書也

延壽養生談

全一冊

此書は世に生秘と云ふもの多し
かたや平の乳子ありてさかたれに病を命に
條ありあまのちいさくはれは孫も久の基を
いへし

左傳杜解補如

瀨釣先生著
綿成先生序文

全一冊

茶人系譜

全一折 故實今物語

全六冊

古式茶人系譜の事を書き
具に神人の心とていふ
松利の如きもの事や

風流志遠新傳

風流中人
平賀屋内著

全二冊

はるかにあそびたるを一巻のり
ゆめゆめのこころを以てし
ゆめゆめのこころ

根なし草

風流中人
平賀屋内著

全二冊

ゆめゆめのこころを以てし
ゆめゆめのこころ

大曲系伝記

お幹の文化
寸核一冊
はるか昔の事
是は

新刀銘書
桂林山人撰
全一枚

本朝のりどりの事
このてぐく作

将棊啓蒙正義

仙舟先生著

全一冊

此書ハ将棊定規より進程と進歩とありてあはれに知らぬはこゝより便利之証也此書より進歩と進程とは別時自ら思入るべきなり

新選棊徑大全

秋山仙舟著

全三冊

俳諧茶摺小木

一具 芳南上人輯

全一冊

此書ハ芳南時流りの名人書翰の集り也此書は芳南上人の初学の見物と云ふべし世の風潮を志し人はいはれしと云ふべし

語見舟詩文集

関西先生著

全一冊

此書ハ舟り舟りたる程ありてあはれに知らぬはこゝより進歩と進程とは別時自ら思入るべきなり

文政三年庚辰三月刻成



江戸四日市廣小路

書物問屋 上總屋利兵衛梓

